

2020年度～2024年度 学術変革領域研究(A)

生涯学の創出

——超高齢社会における発達・加齢観の刷新

学術変革領域研究(A)「生涯学」事務局

Email: lifelongsciences@gmail.com

<https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp>



多様な成長と変容を繰り返す
新しい「人間の生涯」の理解をめざして

領域代表 月浦 崇
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授

65歳以上の高齢者の割合が総人口の28%を超えている我が国にとって、超高齢社会に対して社会全体としてどのように対応していくのかは、喫緊の解決が求められる重要な社会問題です。これまで、人間の生涯は「成長から衰退へ」という単純な枠組みでとらえられてきましたが、人生100年時代の到来とともに、従来のような固定的な生涯観だけで人間の生涯を理解することは難しくなってきました。そこで本領域では、従来の生涯観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセス(下図)としてとらえ直すことを目的とした、新しい学際的研究領域である「生涯学」を創出し、研究を展開します。

そのために本領域では、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する予定です。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざしていきたいと思っています。



領域概要

本領域の目的

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な発達・加齢観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセスとして明示することを目的とする。そして、人間に関する多様な学問分野を融合することで、新しい学際的研究分野としての「生涯学」を創出する。その目的を達成するため、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、

本領域の内容

本領域では、既存の学問分野にとどまらない広範で多元的な研究を実施することで、従来の生涯観を刷新するための心理・社会メカニズムの解明とその社会実装を進める。

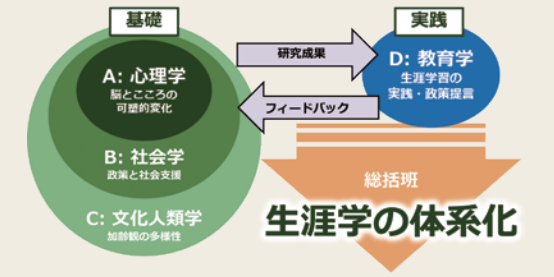
具体的には、高齢期でも獲得できる認知機能の性質と、高齢期には獲得しにくく衰退・消失してしまう認知機能の性質を若年者との比較の中で実験的に明らかにし、柔軟な可塑性が引き出されるメカニズムを明らかにする(認知心理学、生理心理学)。また、認知機能障害の実態とそれに関わる認知予備力について検討する(臨床心理学)。さらに、多様な実社会において、様々な世代や障害に対する適切な生涯観に依拠しつつ、新たな発達・加齢観の下で育まれる豊かな生涯を支えるために、効果的なソーシャルサポートとはどのようなものかを大規模社会調査から明らかにする(社会学)。そして、知識や技能の獲得過程と成熟過程もしくは消失過程が、文化や生活環境が違う場所ですどのように発現しているのか、社会制度や生態環境によってどのような影響を受けるのか、多様な人類社会においてどのような発達観や加齢観、ライフ

期待される成果と意義

本領域の中心的な成果は、「生涯学」という新しい加齢観に根差した学際的な研究領域を世界に向けて確立することであり、超高齢社会に有益となる新たな生涯観を社会へ提供することである。すなわち、新しい生涯観に裏打ちされた人間発達の実態を明らかにすることで、生涯発達という発想を社会に広め、人

多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざす。

サイクルがあるのかを多様な社会集団に対するフィールドワークから明らかにし、それらの比較を通して多様な生涯観を相対化することで、新たな生涯観を生み出す社会的要因とその可能性と限界を探る(文化人類学)。そのうえで、これらの基礎的知見を基盤としつつ、地域や個人に即した社会教育プログラムを実践することで、新たな生涯観の中で実現される社会教育プログラムを実装する(教育学)。このようにして、人間に関する諸科学、すなわち心理学、文化人類学、社会学、教育学等を融合して基礎から応用への展開を進め、さらにそれらの研究を循環させることで、従来の発達・加齢観を刷新する新たな「生涯学」を創出する(下図)。



間が年齢を重ねていく中でいかに柔軟性と多様性を持つ存在であるかを示せるはずである。また、脳機能の加齢による可塑的変化のメカニズムを理解し、それに基づいた教育法の開発も期待できる。それは同時に、新しい生涯観に基づく豊かな超高齢社会の実現に向けた科学的基盤を提供することでもある。

目次
Contents

領域代表挨拶	02
領域概要	03

メンバー・インタビュー

Vol.4◆石井山竜平	04
Vol.5◆松井三枝	07
Vol.6◆筒井淳也	10

研究班一覧

研究組織図	13
計画研究班一覧	13

2021-2022年度活動報告

東北大学社会教育主事講習への「生涯学」の導入 2年目	18
「生涯学」領域会議開催報告	20
受賞報告	24

研究クローズアップ

Features01◆地域が誇るブランド米づくりの経緯に学ぶ	26
--------------------------------	----

活動報告一覧	29
業績一覧	36
「生涯学」国際シンポジウム開催報告	43



「よりよく生きるための学び」

の姿を
東北から発信したい

石井山竜平 社会教育班代表

メンバー・インタビュー Vol. 4

生涯学プロジェクトの社会教育班は、研究成果を社会実装するための窓口という役割をもっています。代表を務める石井山竜平さんに、その役割や、班としての研究テーマ、東北を拠点とする意味について伺いました。

取材・構成…江口絵理
撮影…桂嶋啓子

——— 生涯学の考え方や知見を社会実装するために、この班はどのようなことをするのでしょうか。

まずは、私が東北大学で担当している「社会教育主事講習」に、生涯学代表の月浦先生から生涯学のコンセプトを話していただく機会や、社会学や文化人類学など各領域の代表の方から、どのような研究をされているのか、直接にお話しいただく機会を組み込むことから始めています。

社会教育主事とは、上記の講習を受けた人が任用される専門職で、主に自治体の教育委員会で社会教育・生涯教育の計画策定や、公民館や図書館などの施設の条件整備を担う立場の人です。つまり、その地域の社会教育のあり方に大きな影響を与える人たちなのです。その方々と生涯学の知見を共有することが、社会実装の入り口になると考えています。

ただ、講義で研究を紹介しただけでは実装にはなかなかつながりませんので、今後は、現場でどの知見をどのよ

“ 日本生涯学習政策や東アジアの教育価値観を検証し、新しい社会教育を展望・実装する ”

うに応用できるかを考え合うワークショップを開催するなど、プログラム上の工夫を凝らしていこうと思っています。

——— ところで、「社会教育」と「生涯教育」とは同じものでしょうか、別のものでしょうか。

学校教育制度は、国や社会、地域ごとに、様々な個性はありながらも、ある程度、定型の枠組みを共有していますよね。一方で、それ以外のところで組み立てられている教育・学習のありようは、国や社会に応じてあまりにも多彩であり、呼称も多様です。日本では「社会教育」という表現が使われて久しいのですが、国際的には、学校教育（Formal education）制度と対比させた、Non-formal educationとの呼称などが一般的です。そうした整理に学べば、直接的に学歴に結びつかない教育・学習の総称、と理解してもいいかもしれません。

私自身は中学生・高校生のころからずっと、上の世代が若い世代を鑄型にはめこむようにして知識を教える学校教育への違和感がありました。しかしその一方で、「人が学ぶこと」そのものについては強い関心があり、それが社会教育学を志した理由です。

「生涯学習」とは、人が学齢期に限ることなく生涯にわたって学び続ける機会を提供することを意味する点では社会教育と重なるはずですが、社会教育の研究者の多くは、この言葉を看板に掲げた1980年代後半以降の日本の生涯学習政策をかなり批判的にとらえてきました。

というのも、この「生涯学習」という旗のもとで、それまで公が担ってきた社会教育の重要な役割を縮小して民間に委ねるなど、社会教育を大きく劣化させかねない政策が強力に推し進められたからです。しかし今日では、国の生涯学習政策そのものが下火になっています。

生涯学プロジェクトにおける社会教育班

は、この約30年間の生涯教育政策の功罪を、かつては対立的で、直接的な論争の機会さえなかった立場と立場の交流をもしかけながら、検証しています。次なる生涯学習政策を展望するには、過去をただ批判的に検証するのみならず、成果にも目を向ける必要があるでしょう。

あるいは、国の政策とは別に、それぞれの自治体、あるいは地域には、住民主導で互いのくらしの質を高め合うための共同学習実践は無数に存在します。そうしたものをつぶさに拾い上げ、分析することが、私自身のライフワークでもあります。

そして、それらから見出される教訓を今後の社会教育・生涯学習政策に生かしていくことが、私たち社会教育班が今、目指していることです。

——— 社会実装の窓口役を果たすのとは別に、「班」としての研究テーマがあるということですね。

はい。そして社会教育班にはもう一つ、研究テーマがあります。日本、中国、韓国、台湾における生涯教育政策や実践の比較・検証です。





石井山竜平(いしいやま りゅうへい)
東北大学教育学研究科 准教授

広島県生まれ。九州大学教育学部助手、静岡大学教育学部講師、助教授を経て2005年より現職。日本の社会教育政策を対象にした研究とともに、東日本大震災後の東北に注目し、地域に根差した集団的な学習活動の調査・報告を続けている。編著に『東日本大震災と社会教育——3・11後の世界にむきあう学習を拓く』(国土社)。日本公民館学会副会長、日本社会教育学会理事。

これら東アジアの国と地域は、儒教文化圏としてさまざまな価値観を共有してきました。また、不幸な歴史ながら、日本の植民地化政策のもとで、中国、台湾、韓国の教育制度は日本のそれに大きな影響を受けて発達したことで、いまなお共通点を多く持っています。

日本を始め、東アジアでは多かれ少なかれ、教育が「国家のための、社会のための人材育成」「下の世代は上の世代に従うべし」という価値観のもとで設計されており、社会教育もまた、そうした「秩序」を維持させていくための装置として機能してきた側面もあります。そのような古いくびきを超える社会教育をいかに構築していくか。私たちは、国や地域をまたいで協働しながら考え、実践例を共有したいと思っています。

とはいえ現在、この4つの国・地域のそれぞれの関係性は非常に危ういバランスの上にあることはご存じの通りです。それぞれの歴史認識や国家観に踏み込んだとたんにさまざまなレベルのトラブルに巻き込まれかねない火種を多く抱えています。一口に「国や地域をまたいで研究交流を」と言っても簡単ではありません。

しかしだからこそ、政府レベルの関係性に左右されない生身の研究者同士の交流が必要だと私は考えています。生涯学が問うているのは、「長い生涯をどう生きるか」です。人間という生命体が、昔より長くなった生涯をいきいきと過ごす、その前提に不可欠なのは、平和です。

私たちの班では、しばしば難しい関係に陥りがちな東アジアの隣国同士が平和に共存できるよう、共同研究を

通して平和構築をめざす、という意識があります。コロナ禍の影響で中国、韓国、台湾の研究者とのリアルな交流は困難をきわめていますが、諦めずに続けていこうと話合っています。

——石井山さんは各領域を率いる代表者の中で唯一、東北を拠点とされていますね。領域代表の月浦さんは、東北の研究者にぜひ加わっていただきたかったと語っていました。

東北は東日本大震災を経験しています。とてつもなく大きな喪失体験を経て、今があります。震災後の復興において、国や大企業主導の復興計画によって地元の人の生活や思いがないがしろにされた不幸な事例もたくさんありますが、一方で、地域の人々が連帯して学習を積み重ね、自分たちの暮らしを守った例や新たなコミュニティを築き上げた例もたくさんあります。

そのような、連帯しながら地域を再生させていこうとする学習には、公教育制度の中で展開されている教育・学習とは、質の異なる切実さと展開があります。私はそこに「学ぶということ」の本質を感じています。よりよく生きようと、人々が学ぶ姿を東北から発信し、生涯学の知見に絡り合わせていきたいと思っています。

松井三枝
臨床心理班代表

臨床心理班は、加齢や疾患によって低下した認知機能を改善する方法やメカニズムについて研究を行なっています。その成果はいずれ、健康な人の認知低下予防にも示唆をもたらすかもしれません。代表の松井三枝さんにお話を伺いました。

取材・構成…江口絵理
撮影…中西優

病や障害を抱えながらどう生きていくか 治療から生涯全体にかかわる医療へ

——心理学の研究・教育のかたわら、大学病院の精神科で外来も受け持っていていらっしゃるそうですね。

むしろ、私の出発点は臨床なんです。患者さんと接する現場で生まれてくる疑問、たとえばどうしてこのような問題が起こるのかを知りたい、とか、この問題をなんとか解決できないかという疑問から研究し、その成果を患者さんの役に立てたいという思いで研究しています。

——心理学の中で特に軸足をおいている領域はありますか。

神経心理学が専門です。神経心理学とは脳とこころの関係を解明しようとする領域で、私はとりわけ「脳画像」と「認知機能(記憶や注意など)」の関係を見ることを専門としています。脳画像では形態(構造)だけでなく、機能も見ます。

また、もともと関心を持っていたのは統合失調症でし

メンバー・インタビュー Vol. 5





た。ただ最初の勤務先が大学病院だったこともあって、統合失調症だけでなく、認知症や脳卒中などによる高次脳機能障害など、さまざまな疾患の患者さんと接するようになり、関心の範囲が広がっていきました。

なぜ最初に統合失調症に注目されたのですか？

統合失調症はおよそ100人に1人が発症するとされる、実は身近な疾患なのです。しかも、およそ8割は思春期から30代といった若い時期に発症します。統合失調症では妄想や幻覚が現れ、意欲の減退や感情の平板化、記憶力や注意力などの認知機能の低下なども起こります。

妄想や幻覚には薬物療法である程度対応できますが、記憶力や注意力などの認知機能を十分に改善する薬は存在しません。若くして発症した多くの患者さんは、その後長い人生があるにもかかわらず社会復帰が難しいという状況が長く続いていました。

ならば心理学的アプローチで認知機能の回復を図れないものかと思っていたところ、2005年ごろ、欧米で使われ始めた「認知リハビリテーション」（以下「認知リハ」）の存在を知りました。

統合失調症の患者さんは健忘症の患者さんとは異なり、まったく物事を思い出せないわけではありません。覚え方の簡単なコツ（たとえば多くの要素を一度に記憶したいときは、前から順にではなく、カテゴリに分けて覚える、など）をこちらが明確に指示すると、わりあいうまく覚えられたりします。

こうした患者さん特有の認知のしかたをふまえて、認知機能の回復・維持のための訓練をするのが「認知リハビリテーション」です。これだ、と思いました。

そこから私は、日本で認知リハの存在を知ってもらうために第一人者による解説書を翻訳したり、どのような学習なら認知機能改善の可能性があるかを分析する、といった認知リハの基礎的な研究にも取り組み始めました。

外来で私が担当する患者さんに認知リハを行なったところ、認知機能にはたしかに改善が見られました。さらに、改善された方の多くは、集中的なりハビリを終えて半年後にあらためて検査をしても認知機能のレベルが維持されていることが確認できました。

病そのものを取り除くことはできなくても、心理学的なりハビリによってその患者さんの人生が変わりますね。

医学の進歩によって、これまでだったら助からなかった、あるいは長生きは難しかった疾患でも助かることが増えてきました。統合失調症では、華々しい妄想や幻覚は薬である程度抑えられます。

しかし、このことは一方で、病や障害を抱えた状態でその後の長い人生をどう生きていくか、という別の課題も生みます。医療は、単に命を助けるための治療だけではなく、患者さんの生涯全体にかかわるものになってきている。医療とはすなわち「生涯学」だ、というのが私の実感です。

この「生涯学」プロジェクトが生まれる前から、生涯学を実践していらしたのですね。ところで、認知リハはほとんどの患者さんで効果が出るのでしょうか？

まず、リハを「続けられる人」と「続かない人」がいます。どうも、リハを始める段階で違いが生まれているように思われます。こちらが同じようにできるだけ丁寧に説明しても、理解して続けられる人と理解できず続けられない人がいるのです。

そうした個人差はどこから生まれるのか、という疑問を抱いていて目についたのが、認知症の領域で使われる「認知予備力」という概念でした。

認知症の臨床では、脳には病理学的に認知症の所見があるにもかかわらず、病初期には、大きな問題もなく生活している方が一定数見られます。それは、その人の「認知予備力」が高かったために、認知症による認知機能の

“ 統合失調症からの「認知リハ」 認知症からの「認知予備力」 領域を超えて「生涯」に資する知見へ ”

低下をカバーできているからではないかと言われていました。

認知予備力とは、その人が認知症になる前までに蓄積してきた能力のことです。当然ながら、その人が受けてきた教育、やってきた仕事、余暇活動の種類や期間、頻度、強度などによって個人差が出てきます。

この認知予備力という概念は統合失調症の臨床にも応用できるのではないかと私は考えました。もしかしたら、認知予備力が高い人は統合失調症の予後がよいかもしれない。もし認知予備力を測ることができれば、その患者さんの予後を予測することもできるのではないかと。

まず必要なのは、認知予備力を測る道具です。欧米で使われてきた調査法があるので、いま、私はその日本版を標準化する作業をしています。

もし認知予備力が測れ、認知予備力が高いほど統合失調症や高次脳機能障害の発症が抑制されたり、軽症で済んだりすることがわかれば、健常な人が、そうした病を予防するためにはどのような生活をすればいいかを知ることでもできるでしょう。

まさに「長くなった人生をどうよりよく生きるか」に資する研究になりますね。

統合失調症の領域から出てきた「認知リハ」、認知症の領域で使われてきた「認知予備力」という考え方は、それぞれの分野の中だけでなく、脳損傷による高次脳機能障害や健常な人の発症予防などさまざまな方面に応用できるでしょう。この「生涯学」という大きなプロジェクトで成果を出すことが、他の分野や臨床現場への波及につながると期待しています。

また、私自身が統合失調症と高次脳機能障害の両方と関わってきたことで発見があったように、「生涯学」の中でも、心理学と社会学や文化人類学をまたがることで見えてくるものもあるのではと思っています。

松井三枝(まつい みえ)
金沢大学国際基幹教育院 教授

富山県出身。富山医科薬科大学医学部助手、ペンシルバニア大学客員研究員、富山医科薬科大学(2005年より富山大学に統合)医学部助教授・准教授を経て2016年より現職。認知機能障害を持つ患者の診療や検査に携わるとともに、脳画像を活用した認知機能の研究や認知機能改善に関する研究を行っている。編著に『精神科臨床とリカバリー支援のための認知リハビリテーション——統合失調症を中心に』(誠信書房)など。



高齢者の社会参加に必要な環境的条件を社会調査から探る

取材・構成…江口絵理
撮影…楠本涼

生涯学には社会学分野として、「ウェルビーイング班」と「高年社会参加班」の二班があります。高年社会参加班の代表を務める筒井さんに、ご自身の研究テーマと、班としてどのような社会調査を構想されているか伺いました。

筒井淳也

高年社会参加班代表



——筒井さんの専門は「家族社会学」とのことですが、なぜ家族に関心を持たれたのですか？

家族って、社会のなかでとても特殊な地位を与えられていますよね？ 現代社会では「えこひいき」はあまりよくないこととされますが、親が自分の子に多額のお金を遣ったりすることには疑問をもたれません。なぜ家族だけが特別扱いなのだろう、と不思議に思ったのが出発点でした。

人が自分の家族を特別扱いするなんて当たり前だと思うかもしれませんが、それにはデメリットもあります。たとえば、最近「親ガチャ」という言葉がよく話題になりますが、親が裕福か否かによって子の人生が大きく左右されてしまう、といったことはその典型ですね。

——身内としての責任にこだわるあまり、介護疲れによる不幸な事件が起きることも多いですね。

“時代や立場により変わる生涯観。変化と多様性を描き出す社会学の射程を研究に生かす”

日本はとくに「家族の面倒は家庭内で見るべき」という規範が強い国です。そうすると、昔に比べて親族のサポートも少なく経済的にも脆弱な今の若い世代は、相当な覚悟がないと結婚を決められない。

日本で未婚化・晩婚化が進み続ける背景には、こうした家族主義的規範の強過ぎるプレッシャーがあるのでは、と言われています。私は社会調査によるデータをもとに、このような問いを含めて「家族のあり方」を分析する研究をしています。

——生涯学では同じく社会学分野の柴田悠さんのウェルビーイング班も統計的なデータをもとにした研究を進められていますね。柴田班は主に子どもを、筒井班では高齢者を対象にするという分担と伺いました。

私たちの班には「高齢者の社会参加」をメインに研究している方にご参加いただき、研究の主力を担っていただいています。代表である私は、班としての考え方を整理したり、主力の方々が成果を出しやすいようお膳立てをすることが仕事です。

——班としての考え方とは？

生涯学プロジェクト全体のテーマは「従来の生涯観の刷新」です。しかし私たち社会学の人間から見ると、生涯観は刷新すべきものである以前に、勝手に変化していているものなのです。

手塚治虫の漫画に登場する還暦の女性は、腰が曲がり、歯も抜けたよぼよぼの老人として描かれています。1970年代の60歳はいつ命が終わってもおかしくない年頃でしたから。当時の女性は子たくさんで出産間隔が長く、50歳ごろまで子育てが続くことも珍しくないの

で、その後の「高齢期」が長く続くことは稀でした。

しかし今、60歳の女性は1970年代当時よりはるかに元気で、人生100年とするならその後40年という長い人生が存在します。ですから、1970年代と2022年の生涯観はまるで違うものになっている。この意味では、「生涯観はひとりでに刷新されてきた」のです。私たちの班では、これを共通理解としようと話しています。

そのうえで、今の生涯観とはどのようなものか、今後どのように変わっていく可能性があるかを分析していきたいと思っています。

——時代ごとに高齢期のとらえ方が違うということですね。

はい。さらに、同じ2022年を生きる人々でも、性別や年齢、学歴や年収、既婚か未婚か、法律婚か事実婚か、離婚経験の有無、家族構成、都市部在住か地方在住かなどによって異なるだろうと見ています。



たとえば、ずっと独身で都会に暮らしてきた人と、農村部で安定した結婚生活を過ごしている人とは、どのように自分が老いていくかという見通しも、どのように老いていきたいかという価値観もおそらく全然違うでしょう。この班では2022年度に、こうした生涯観の多様性を調査します。

————— 調査は翌年にも行うとのことですが。

2023年度末実施予定のメインの調査で、最終的に、高齢者の社会参加にはどのような条件が必要かを探りたいと考えています。

女性の社会参画に関する研究では、ケアを必要とする身内がいると女性が外に働きに出るのが難しくなることがわかっています。同じように高齢者の社会参加にも配偶者の健康状態などが影響することが想像されますが、これまであまり調査分析が進んでいないことも多いので、2023年度に最新のデータをとって検証したいのです。

また、仮に介護を要する配偶者がいても、介護制度にうまくアクセスできれば本人の社会参加のハードルは下がるでしょう。そのような「制度」に関する条件についても探ります。

生涯学における心理学分野の研究では、高齢になっても潜在的な能力が十分に残されているのだから、これまでに考えられていたよりも高齢者は能力を発揮したり



人生を楽しんだりすることができるんだ、と言えるような知見が期待されていると思います。

しかし、仮に身体的・認知的能力があるとわかって、高齢者本人にとって家族的・社会的条件が整わなかったら社会参加はやはり難しい。高年社会参加班の研究はそこをカバーするものになるでしょう。

女性の社会参加に何が必要かという社会学的な研究はずっと行われてきました。例をひとつ挙げるなら、社会制度面では育休制度が必要だとわかり、普及が進みました。では、高齢者の社会参加に必要なものは何なのか？その知見は足りていません。労働力不足がいよいよ顕在化してきた日本において、社会からのニーズも大きい研究だと思っています。

————— とはいえ、アンケート調査によって人々の多様な価値観をとらえるのは簡単ではなさそうですね。

そうですね、ものの考え方は絶えず変わっていきますから。たとえばお墓に対する考え方はこの10年で急激に変化し、多様になりつつあります。妻は夫方の家墓に入りたいか、実家がいいか、あるいはお墓は不要か、など……。

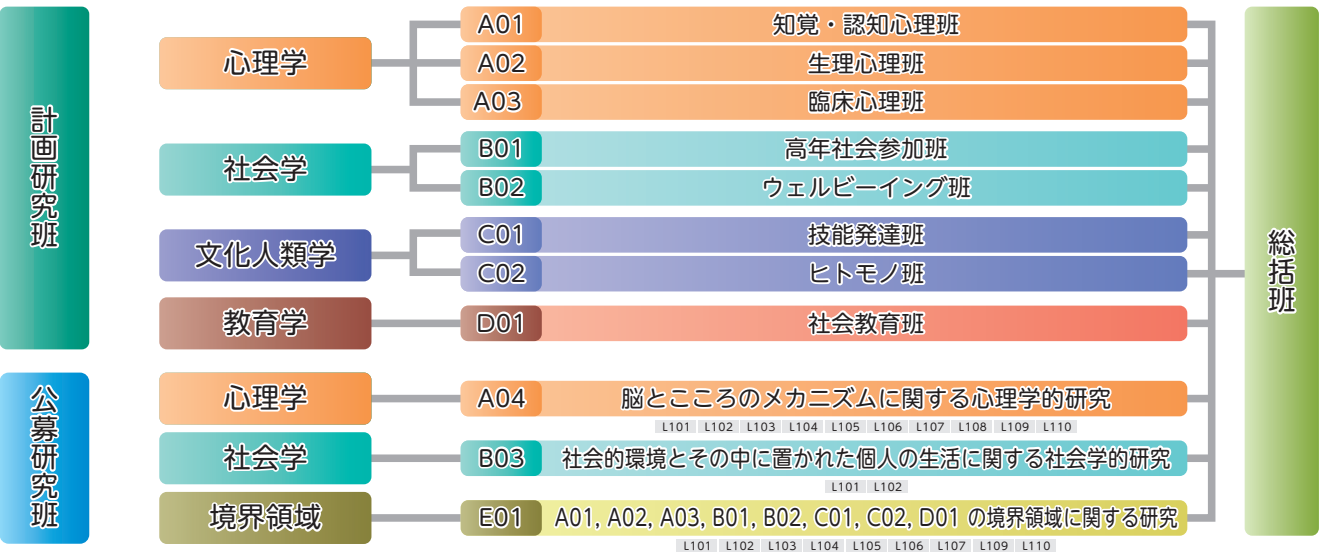
社会学はこうした変化を記述することや多様性を描き出すことも射程の内なので、実験心理学のように「どの時代でも変わらず、人間一般に通用する知見」を探ろうとする学問とは対極的と言ってもいいかもしれません。

どちらのアプローチにも強みと弱点があるので、生涯学においても双方を組み合わせることによって互いの限界を明らかにしつつ、それをうまくカバーできるような共同研究ができるといいのではと思っています。

筒井淳也(つつい じゅんや)
立命館大学産業社会学部 教授

福岡県出身。2014年から現職。計量社会学・家族社会学を専門とし、社会調査によるデータをもとに日本の未婚化や成人親子関係など家族のあり方や変化を描き出すかたわら、行政への提言や一般向け書籍の執筆にも力を注いでいる。著書に『仕事と家族』（中公新書）、『結婚と家族のこれから』（光文社新書）、『社会を知るためには』（ちくまプリマー新書）、『社会学：非サイエンス的な知の居場所』（岩波書店）ほか多数。

研究組織図



計画研究班一覧

知覚・認知心理班(認知心理学)

A01 知覚系の知識獲得機構の加齢変化



代表者
寺本 涉
熊本大学大学院
人文社会科学部 教授

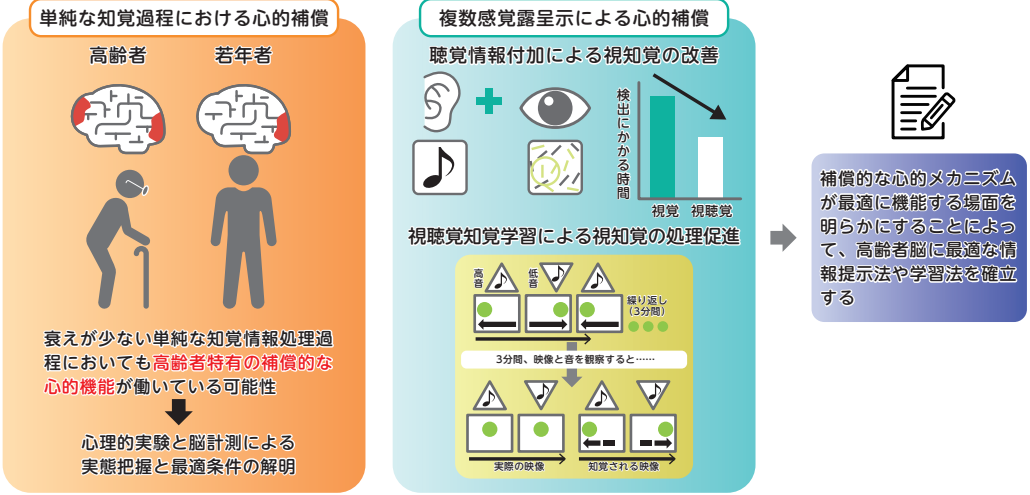
分担者
日高聡太
立教大学現代心理学部 教授
川越敏和
東海大学文理融合学部 講師

研究概要

本研究では、特に複数感覚情報
の処理に着目し、高齢者におけ
る心的な補償機能の存在を確
認し、そのメカニズムを明らかに
すること、そして、高齢者、ひいて
は人間が本来もつ知覚・認知の
可塑性を最大限に引き出し、より
豊かな生活をおくるための方

法を提言することを目的としてい
る。現在までに、身体運動機能
が低下した高齢者において、身
体位置感覚や身体所有感におい
て視覚情報による補償が顕著に
みられることや、行為の結果を
知覚する際、特に実行機能の低
下した高齢者では、感覚情報よ

りも知識を優先する傾向がある
ことなどを明らかにした。その他、
音知覚や注意システムにおける
補償や顔知覚の加齢変化等につ
いて、身体運動機能、実行機能、
社会的機能との関連性に着
目しながら検討を進めている。



生理心理班(生理心理学)

A02

記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構

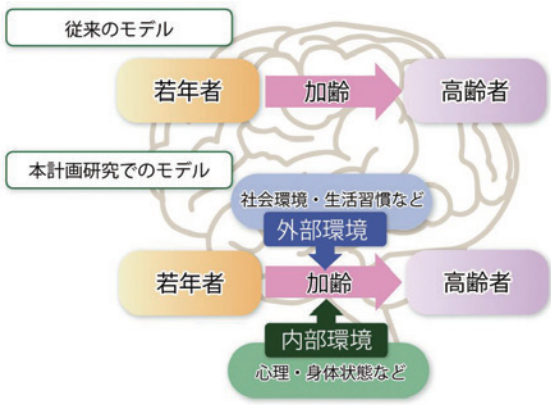


代表者
月浦 崇

京都大学大学院
人間・環境学研究所
教授

研究概要

本計画研究では、ヒトの記憶の加齢による経年変化を脳の器質的变化だけで説明するのではなく、社会的環境との相互作用の中で、どのように脳内メカニズムが可塑的に変化するのかの視点から解明することを目的とする。その目的を達成するために、健常若年成人と健常高齢者の記憶に関連する神経メカニズムを脳機能画像研究から検証すると同時に、脳機能画像研究で得られた知見の機能的妥当性を明らかにするために、神経疾患患者を対象として神経心理学的手法によって検証する。これまでの研究では、他者との社会的関係によって影響を受ける記憶の神経メカニズムとして、眼



窩前頭皮質と海馬の相互作用メカニズムが重要であることや、デフォルトモードネットワークと前頭頭頂ネットワークの2つの脳機能ネットワークが、共感性と主観的幸福感を媒介することが認められている。また、表情のような顔に由来する社会的信号の処理に関わる神経表象が加齢に

よって変化することや、表情による顔記憶への影響の基盤となる神経ネットワークが加齢によって変化することも明らかにされている。今後も継続的に本研究テーマを掘り下げていくことで、当初の目的に対して多角的にアプローチしていく予定である。

臨床心理班(臨床心理学)

A03

認知機能からみたこころの健康へのアプローチ
——予防とレジリエンスのために



代表者
松井三枝

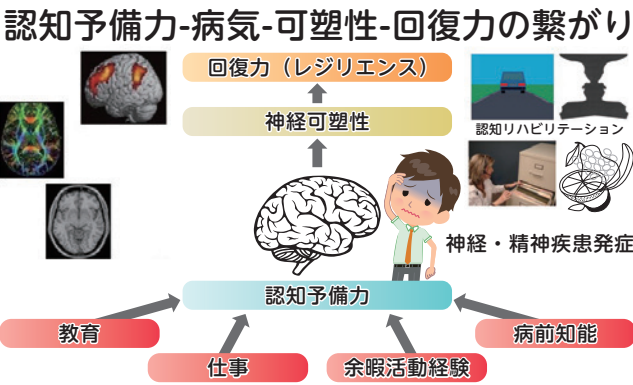
金沢大学国際基幹教育院
臨床認知科学
教授

分担者

吉澤浩志
東京女子医科大学脳神経内科 講師
菊谷まり子
金沢大学国際基幹教育院 准教授

研究概要

認知機能という観点から、統合失調症および青年や成人とくに高齢期までの脳器質性疾患、認知症や気分障害について検討する。これらの疾患では認知機能障害がしばしば認められることが知られており、日常生活機能や精神機能の維持および社会復帰には認知機能の問題が大きいと考えられる。これまで健常成人のメンタルヘルスと適応性の調査を行ない、認知予備力との関連を検討してきた。さらに、脳腫瘍患者、認知症患者および精神疾患(統合失調症と気分障害)の認知機能と認知予備力と



の関連を調べてきた。さらに、これらの患者の認知機能と認知予備力の検討をおし進め、社会復帰や術後回復力の予測データを構築する。さらに、認知機能・認知予備力と脳構造・脳機能との

関連を検討することにより、神経可塑性への寄与を明らかにする。このことにより、新しい生涯観の下で人間の一生を支える脳とこころの機能維持に資する機構の解明に寄与することをめざす。

高年社会参加班(社会学)

B01

高齢者の社会参加の家族的・社会的条件の探索



代表者
筒井 淳也

立命館大学
産業社会学部
教授

分担者

菊澤佐江子
法政大学社会学部 教授
竹内麻貴
山形大学人文社会科学部 准教授
田中慶子
慶應義塾大学経済学部 特任准教授
渡邊大輔
成蹊大学文学部 教授
西野勇人
東日本国際大学健康福祉学部 特任講師

研究概要

本計画研究班では、申請時の研究目的であり引き続き「生涯学」の重要なテーマである高年期の社会参加について、社会調査データをもとに探究することを主目的としている。ただしこの課題は2023年度に予定されている大規模調査を活用することになるため、今年度はそのための準備期間となる。幾度かの研究会を通じて、出生コーホートなどを組み入れたライフコース論を組み入れることで、既存研究と異なった視点から、社会参加の変化と現状、そして将来についての見通しを与えることがめざされる。また、生涯学の領域全体の目標



は「生涯観の刷新」であるが、本計画研究班では、この課題に直接に関連するデータの収集を今年度実施するインターネットモニター調査を通じて行う。人々はどんな「生涯観」を持っていて、それはその人が置かれた環境や

人口学的特性(性別、出生年代、学歴など)に応じてどのくらい異なっているか。こういった、「生涯観」を考える上で必要な基礎データになることが期待される。

ウェルビーイング班(社会学)

B02

ウェルビーイングの規定要因に関する実証的研究

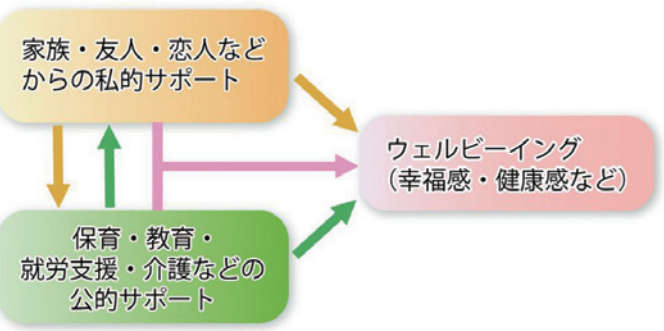


代表者
柴田 悠

京都大学大学院
人間・環境学研究所
准教授

研究概要

本研究では、本領域「生涯学」がめざす「豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明」とその成果の「社会実装」に向けて、現代日本社会における「豊かな人生」つまり「ウェルビーイング(幸福感・健康感など)の高い人生」の社会的要因をさぐる。具体的には、幼少期から青年期、壮年期、高齢期にかけて、ライフステージの各時期にどのような私的サポート(家族や友人など身近な人からのサポート)や公的サポート(保育・教育・就労支援・介護など)を受けることが、その後の人生でのウェルビー



ングにどのように影響するのかを検討する。そのために、生涯の各時期に受ける私的サポートと公的サポートを詳細に把握する、日本で初めての大規模な質問紙調査(ウェブ調査と郵送調査)を実施する。2021年にはウェブ調

査を実施して分析を行った。その分析結果をふまえて、2023年には郵送調査を予定している。これらの調査により、どのような社会関係や支援が「ウェルビーイングの高い人生」をもたらすのかを検証し、実践的・政策的示唆を得ることをめざす。

技能発達班(文化人類学)

C01

技能・熟練・暗黙知の習得・発達過程に関する人類学的研究

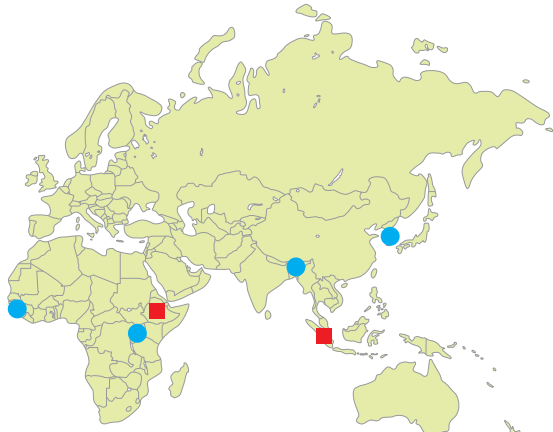


代表者
金子守恵
京都大学
アフリカ地域研究資料センター
准教授

分担者
重田眞義
京都大学
アフリカ地域研究資料センター 名誉教授
山越 言
京都大学ASAFAS 教授
伏木香織
大正大学 教授
座馬耕一郎
長野県看護大学 准教授

研究概要

本研究は、アジアやアフリカ大陸に暮らす技能集団が身体を通じて暗黙知を体得する過程に焦点を当て、担い手たちの1) 生物学的発達を示す行動調査、2) 身体技法の習熟度、3) 発達段階の文化的制度化の相関性について精査し、文化人類学的な比較検証を行う。これまでは、アジアやアフリカのさまざまな地域に暮らす技能集団に見出される製作技術や演奏方法を描きだし、製作者が年齢や経験を重ねることによって技能を熟練させていくことを指摘してきた。その一方で、作りだされたものやその技術が、製作者の年齢や経験



■参照フィールド ●連携フィールド

とは関わりなく、周囲の人々から評価されていることもあきらかになっている。技能の習熟とは、製作者が特定の身体の動かし方を会得する過程であると同時に、彼女ら／彼らの人格形成にも影

響を与える営みであることが示唆されている。引き続き技能集団に注目して、多元的な発達過程を描き出し、「生涯学」がめざす従来の生涯観を刷新することをめざす。

ヒトモノ班(文化人類学)

C02

生涯を通したヒト-モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究



代表者
倉田 誠
東京医科大学医学部
准教授

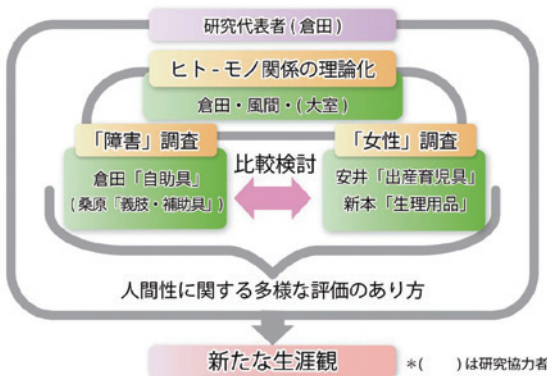
分担者
風間計博
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授
安井眞奈美
国際日本文化研究センター 教授
新本万里子
広島私立大学 客員研究員
紺屋あかり
明治学院大学国際学部 専任講師
山本健太
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 助教

研究概要

本研究班では、日本やオセアニアの諸社会において身体や認知の障害を軽減したり、性差による生理的变化や社会的役割に対応したりする際に使用・装用される様々なモノに着目し、1) それらが社会に導入され個々の身体に馴染んでゆく過程、2) それらを用

いる人びとの用法や動作の変化、3) それらを身につけ用いながら生きてゆくことに対する社会的評価、を行動観察やインタビューを主とした継続的な調査によって明らかにする。コロナ・パンデミックによって海外調査の実施が困難な状況のなかで、本班はこれまで

国内での共同調査を中心にデータや知見の収集とそれらの検討を行ってきた。今後は、研究分担者・協力者が各自のフィールドにおいて海外調査を実施するとともに、国内調査で構築した基盤を活かして「生涯学」の社会実装の可能性を探ってゆく予定である。



社会教育班(教育学)

D01

生涯学習に関する国家政策および地域主導計画の東アジア的視座からの検証



代表者
石井山竜平
東北大学教育学研究科
准教授

分担者
上田孝典
筑波大学人間系 准教授
李 正連
東京大学大学院教育学研究科 准教授
上野景三
西九州大学子ども学部 教授
山口香苗
秋田大学教育文化学部 専任講師
西川一弘
和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 准教授

研究概要

本研究の目的は、1) 一連の計画研究から得られた知見を、各自治体の社会教育・生涯学習の担当者や教職員向けの講習・研修、およびこれからの生涯学習計画にパイロット的に実装することにある。並行して、2) 東アジアと日本における生涯学習政策・実践を比較検証しつつ、3) 地域主導

の生涯発達支援や、地域人材育成計画の新展開に加担していくことで、政策と実践の双方への実装を目指す。社会実装をめぐる、2021・22年度、東北大学社会教育主事講習に生涯学に関する授業を導入。加えて、自治体職員有志と学習会を行い、社会実装の可能性を検討中。「日本の生

涯学習政策検証」班は、2022年1月(東北大)及び8月(南三陸)、当時の政策の中枢者と、当時政策を批判的に分析していた研究者との対話を仕掛け、重ねている。「東アジア」班は、2023年2月、生涯学習政策が高齢者の学習機会づくりに特化した展開をしている台湾の調査を実施予定。



総括班

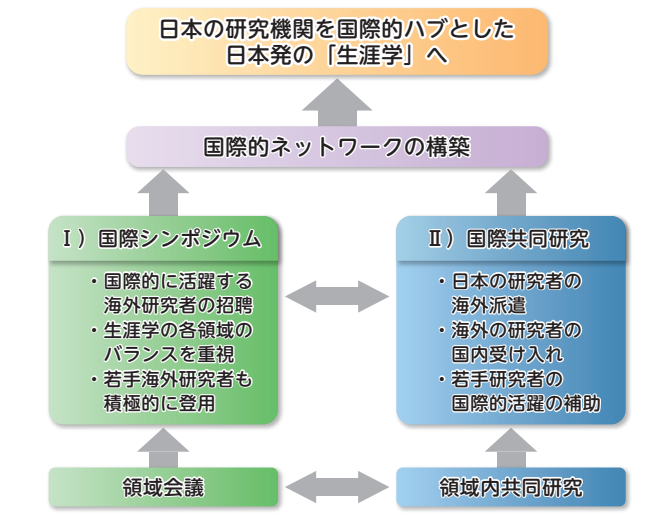
生涯学の創出——超高齢社会における発達・加齢観の刷新



代表者
月浦 崇
京都大学大学院
人間・環境学研究科
教授

研究概要

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な生涯観を刷新し、その成果を社会へ還元していくことをめざしている。そのために、総括班では以下の3つの方策を推進する。
1) 定説を打ち破り、新たな「生涯観」を提唱する
・領域代表者による各計画研究のマネジメント支援
・若手研究者に多くのチャンスを与えるような公募体制の構築
2) 多様な研究領域を連携・融合する
・年2回の領域会議の開催
・領域内交流プログラムの運営
3) 新しい研究領域としての「生



涯学」の国際的プレゼンスを高める
・国際シンポジウムの開催

・国際共同研究の推進(若手研究者の双方向的な国際交流)
・国際研究発表の補助

2022年6月～8月 宮城県・福島県・山形県

D01 東北大学社会教育主事講習への「生涯学」の導入 2年目

報告：石井山竜平(D01社会教育班 研究代表者／東北大学)

オンラインに振り切ったところから対面を取り戻す

東北大学社会教育主事講習への生涯学の導入が図られた昨年度(2021年)は、その前年度、新型コロナ蔓延を受けての初の講習中止を経て、なんとしてでも再開することを目標に、プログラムのほぼすべてをオンラインとして実施したタイミングでした。ただしそれは、あくまでも緊急避難的な措置であって、内容的には、受講者相互の関係形成などで、課題が少なからず残された、というのが、私どもの振り返りでした。

そうした昨年度を経ての今年度は、できるだけコロナ以前の講習の質を取り戻すことを目標に、対面での授業や、講習以外の時間において受講生相互が関われる時間をできるだけ取り戻すことを目指しました。

しかし、2021年3月の福島県沖地震によって、宮城の施設の多くが被災し、コロナ禍の基準で受講生を収容できる施設が大学内外どちらにも見つからない、という事態に、大いに悩まされました。結果、我々の目指すところよりもかなりオンラインを多用したプログラムとなりました。それに加え、天候異常にも見舞われ、豪雨災害の対応で本務の関係で避難所運営に従事せざるを得なかった受講者もありました。なにより、受講生の中からコロナ濃厚接触者や罹患者が幾人か現れ、そのたびごとに、各県・市や関係者と、幾度も協議を重ねてきたことは、今年度独特の思い出です。

とにもかかわらず、いったんはオンラインに振り切ったところ

ろから、かつて当たり前であった対面を取り戻すことがいかに大変かを痛感した、今年の主事講習となりました。

小集団による調査研究活動を軸に展開する講習

本講習の、他の一般的な講習・研修と最も異なる特徴は、受講者の中で小グループを形成し、独自の研究課題を設定し、講習の全日程の期間を活用して調査研究を進めてもらう、という点です。上述のような、対面を取り戻したいという私たちの考えは、この講習が、個人的、受け身的に授業を受講するだけではなく、協働的、能動的に調査活動を行うものであり、そこでは、チーム内の生身の人間関係、調査対象にしっかりとかわる対面的営みが不可欠である、と考えているからです。

研究調査の課題設定は、かつては受講生や所属教育事務所の判断に委ねていましたが、昨年から、①ユニバーサル・アプローチ(公民館等、すべての地域住民に開かれた学習支援)、②ターゲット・アプローチ(不登校の子どもたちやその親など、学習に困難を抱えている方々へ支援)のどちらかにかかわる課題を設定することとしています。受講生は授業の受講と並行して、小グループ単位で、課題設定、計画の組み立て、諸々のアポイント、ヒヤリング、アンケートの実施・分析といった一連を、話し合いながら進めていくことになります。その成果は、本講習の最終の2日間をかけて、各県市教委関係者にも開いて行われる報告会で報告・協議を行う、という内容となっています。

ゆえに、受講者の講義への理解は、こうしたプロセスにあることと無関係にはなりません。「生涯学」の授業への感想には、自分たちの調査研究と関連させた気づきが、多く述べられています。受講生が取り組んでいる調査(アンケート、インタビュー)とアプローチが近い、社会学及び人類学の授業への感想の一部を、本稿でも紹介します。



社会実装にむけての次年度以降のチャレンジ

昨年、今年の「生涯学」講義の位置づけは、学習も調査もある程度進展した講習後半の段階で行ってきました。次年度は試験的に、研究課題の設定の前段階でこれらの授業を受講してもらい、その社会実装を検討することを課題に含めたチームを設けることを検討したいと思います。

もう一つ、進めているのが、実際の自治体社会教育職員との協議です。私には、日常的に相談しあう関係にある自治体職員の仲間が少なからずおります。そうした方々との話題の中には、例えば、今日の自治体の中枢部の関心は、厳しい人口減、税収減のなか、「いかに企業誘致

を実現するか」に専心しがちで、社会教育・生涯学習政策への関心は微弱である、という話題もあります。たとえばそこに、柴田悠先生(B01ウェルビーイング班 研究代表者)の講義(「不利の親子間連鎖」は統計的に明らかであり、その克服に有効な政策は「0～2歳での発達支援」である)からの学びを入れ込み、その誘致で実現される雇用環境と、十二分な「0～2歳での発達支援」を連動させる、といった政策形成にむけた学習を地域で広げることはできないか、などと話し合っております。まだ粗削りな議論の段階ですが、アイデアを少しでも形にする、そうした3年目以降を目指します。

受講生の感想(抜粋)

社会学からの学び

- 私たちの班でもアンケートデータ分析を行ってきたので、データの説得力を感じました。また、説得力を持つデータとするための設問設定の難しさを感じました。
- データから見た社会はやはり説得力がある。イメージで作り上げられた基準で多くのことを判断しながら生活しているので、そこを越えた知見をなるべく多く知りたいと思った。自分からアプローチしないと考えがリニューアルされないで、能動的な社会生活を心がけたいと感じた。
- 数値というエビデンスを示すことで、言いづらいことも堂々といえるようになる。「不利の親子間連鎖」なんて思っているとも言えないが、社会調査で相関が明らかとなれば、聞く側がすんなりと納得することができると感じた。
- 私自身、今行っている調査を地域に示すために、信じられる量的調査と納得のゆく論理を大切にしたい。

文化人類学からの学び

- それぞれの先生方がそれぞれのフィールドを持っておられて、そのフィールドにのめり込んでいく姿が印象的でした。しかし、フィールドが違っても人間の営

- みは同じであって、やはり人間は社会的な生き物なのだなと感じました。
- 障害者支援に関して言えば、サモアのように、ただ支援のための物が多くあるだけでも意味がなく、あるものを有効的に活用することが大切だと感じた。
- 考える材料がいっぱいある授業だなと感じました。
- エチオピアの鶏飼育。1人だけでは実現されず、人とつながりみんなで作るからこそ実行できたことを考えると、社会教育の考え方そのものだと思います。また、サモアの自助具合の考え方でも、一人一人の話を聞き、実態を知ることや、話すことでつながりができることという意味で、社会教育につながると思いました。世界共通で、話し合うことが、大きな創造力を生み出すということが、心に残りました。
- 新しいプロジェクトを1人で立ち上げることは難しい。しかし、1人では難しいことでも自分の考えに賛同してくれた人の協力を得ると進めることができる。この事は、今までインタビュー調査で話を聞いた人と同じで、世界どこでも一緒なんだなと思った。

領域
全体

「生涯学」領域会議開催報告

2022年3月5・6日 オンライン

「生涯学」第3回(2021年度第2回)領域会議

2022年8月27・28日 ハイブリッド 宮城県南三陸ホテル観洋

「生涯学」第4回(2022年度第1回)領域会議

2022年3月および8月、科学研究費助成事業 学術変革領域研究(A)(2020年度～2024年度)『生涯学の創出——超高齢社会における発達・加齢観の刷新』〔略称「生涯学」〕領域会議を開催しました。

3月5日(土)・6日(日)に開催された第3回(2021年度第2回)領域会議には、70名以上が参加し、口頭発表17件(研究計画班及び公募研究班)・ポスター47件の発表

を中心に、2日間にわたり研究活動やその成果について議論を交わしました。

8月27日(土)・28日(日)に開催された第4回(2022年度第1回)領域会議には、115名(現地70名＋オンライン45名)が参加し、口頭発表・ポスター発表に加えて、分野融合研究に関する講演や南三陸の復興経験から学ぶシンポジウムが行われました。



第3回(2021年度第2回)領域会議 口頭発表セッション1



第4回(2022年度第1回)領域会議 記念写真

※記念撮影の瞬間のみマスクを外しています



第4回(2022年度第1回)領域会議 企画イベント② シンポジウム

「生涯学」第3回(2021年度第2回)領域会議 プログラム概要

[1日目] 3月5日(土)

13:30—13:35 領域代表挨拶

月浦 崇(領域代表者・京都大学)

口頭発表セッション1

座長: 月浦 崇

13:35—13:55 記憶における加齢と社会性の

相互作用の基盤となる脳内機構

月浦 崇(A02班研究代表者・京都大学)

13:55—14:15 脳画像による発達・加齢の

個人差の同定に必要な解析手法の検討

小池進介(A04-L105班研究代表者・東京大学)

14:15—14:35 高齢者の嗅覚と弁別機能

内田さえ(A04-L109班研究代表者・健康長寿医療センター)

14:35—14:55 生涯において他者とのリズム運動同期が

認知機能と社会性に与える効果検証

川崎真弘(A04-L103班研究代表者・筑波大学)

14:55—15:10 休憩

口頭発表セッション2

座長: 松井三枝

15:10—15:30 知機能からこころの健康に取り組む

——予防とレジリエンスのために

松井三枝(A03班研究代表者・金沢大学)

[2日目] 3月6日(日)

口頭発表セッション3

座長: 日高聡太(A01班研究分担者/総括班研究員・立教大学)

10:00—10:20 認知症患者家族の持つ

「あいまいな喪失」についての研究報告

——「進行する、不確実な喪失(感)」を

核とした理論的枠組みと

研究手法の検討

小笠原知子(E01-L101班研究代表者・金沢大学)

10:20—10:40 月経前症候群(PMS)の

症状評価を可能にする

セルフモニタリング アプリの開発

江川美保(E01-L102班研究代表者・京都大学)

10:40—11:00 中年期から高齢期の生活文脈が認知機能、

運動機能、精神的健康に与える影響の検証

——ハーモナイズドデータセット構築の

進捗状況

権藤恭之(E01-L104班研究代表者・大阪大学)

11:00—11:20 未就学児の障害物跨ぎ歩行中の

動的安定性評価

——ケーススタディ

進矢正宏(E01-L105班研究代表者・広島大学)

11:20—11:40 展望記憶のメタ認知の

正確さに関する加齢変化

——自己評価と家族評価の

差異スコアによる探索的検討

三浦佳代子(E01-L109班研究代表者・長崎純心大学)

11:40—13:00 休憩

15:30—15:50 高齢者—若年成人の会話

——トラブル、認知的負荷、モデル化可能性

原田悦子(A04-L102班研究代表者・筑波大学)

15:50—16:10 プレシジョン・エイジングの実現を目指す

神経発達症の発達・加齢研究

木村 亮(A04-L106班研究代表者・京都大学)

16:10—16:30 脳局所容積の加齢変化と

認知機能、幸福感の経時的相互関係

——研究の進捗とNILS-LSAの紹介

西田裕起子(A04-L110班研究代表者・国立長寿医療研究センター)

領域内共同研究事例紹介

16:30—16:40 睡眠と認知機能の関係

——認知予備力の観点から

菊谷まり子(金沢大学国際基幹研究院)

16:40—17:00 休憩

17:00—19:00 ポスター発表セッション

口頭発表セッション4

座長: 倉田 誠(C02班研究代表者・東京医科大学)

13:00—13:20 ライフステージとしての高齢期の変容

——ライフコース論の視点からみた高齢期の

就業

渡邊大輔(B01班研究分担者・成蹊大学)

13:20—13:40 夫婦・親子交流に基づく

「高齢期の社会化」に関する研究

安元佐織(B03-L101班研究代表者・大阪大学)

13:40—14:00 生涯学の創出における

文化人類学的研究の課題

金子守恵(C01班研究代表者・京都大学)

14:00—14:20 社会教育主事講習への「生涯学」の導入

石井山竜平(D01班研究代表者・東北大学)

14:20—14:30 休憩

企画イベント

座長: 寺本 渉(A01班研究代表者・熊本大学)

14:30—15:30 禁教社会の形成と潜伏キリシタンの存在形態

安高啓明先生(熊本大学)

15:30—16:00 講評

領域内評価者: 佐藤嘉倫先生、佐藤一子先生、

櫻井芳雄先生

文部科学省学術調査官: 浅野倫子先生

16:00—16:10 閉会挨拶

月浦 崇(領域代表者・京都大学)

「生涯学」第4回(2022年度第1回)領域会議 プログラム概要

【1日目】 8月27日(土)

14：00—14：05 領域代表挨拶 月浦崇(領域代表者・京都大学)
口頭発表セッション1 座長：寺本渉
14：05—14：25 知覚系の知識獲得機構の加齢変化 寺本渉(A01班研究代表者・熊本大学)
14：25—14：45 人生を懐かしむために ——懐かしさの理由の探索 大場健太郎(A04-L101班研究代表者・東北大学)
14：45—15：05 幼少期の運動経験と脳の老化の関係 石原暢(A04-L107班研究代表者・神戸大学)
15：05—15：25 加齢が接近移動音像の 接触時間予測に及ぼす影響 ——実行機能の観点から 寺岡諒(A04-L108班研究代表者・熊本大学)
15：25—15：45 視覚・聴覚障害者の ライフヒストリーに基づく レジリエンス向上のための生涯学習方法論 三浦貴大(E01-L110班研究代表者・産業技術総合研 究所)

【2日目】 8月28日(日)

口頭発表セッション2 座長：柴田悠
10：00—10：20 公的支援は 「生涯への機会格差」を減らすか？ ——0～2歳での保育・幼児教育が 30代での生活状態に与える因果効果 柴田悠(B02班研究代表者・京都大学)※オンライン発表
10：20—10：40 悪夢のイメージリスクリプトの効果に関する 研究 ——認知行動療法の適用事例報告 松田英子(E01-L107班研究代表者・東洋大学) ※オンライン発表
10：40—11：00 地域在住の超高齢者の認知機能と自立 江口洋子(E01-L106班研究代表者・慶應義塾大学) ※オンライン発表
11：00—11：20 直感的信頼の成人期発達 ——課題有意義性と印象操作の 影響を考慮した三世代間横断研究 鈴木敦命(A04-L104班研究代表者・東京大学) ※オンライン発表
11：20—11：40 フィールドを基盤とした 学際的共同調査が持つ可能性 倉田誠(C02班研究代表者・東京医科大学)
11：40—12：00 高齢者の地域貢献活動への参画について ——ニュータウンにおける高齢者の 生活史調査を通じて 笠井賢紀(B03-L102班研究代表者・慶應義塾大学)

15：45—16：05 高齢者の多面的Well-being ——言語マーカー・主観指標・ バイオマーカーから 中山真孝(E01-L103班研究代表者・京都大学)
16：05—16：20 休憩
企画イベント① 領域内交流プログラム 座長：月浦 崇(領域代表者・京都大学)
16：20—17：20 招待講演 異分野とつながる加齢研究のススメ ——分野融合研究の始め方・楽しみ方 野内類先生(東北大学加齢医学研究所)
17：30—17：45 休憩
17：45—19：15 ポスター発表セッション



第4回(2022年度第1回)領域会議 企画イベント① 招待公演(野内類先生)



第4回(2022年度第1回)領域会議 口頭発表セッション1(寺本渉)



第4回(2022年度第1回)領域会議 ポスター発表セッション

第4回(2022年度第1回)領域会議参加者の感想

原動力となった2日間

私は領域代表である月浦崇先生の下で、外傷により脳を損傷した患者さんの認知機能障害に関する研究に取り組む大学院生であり、昨年度に資格を取得したばかりの公認心理師でもあります。今回初めての現地開催ということで以前より心待ちにしていた領域会議は、分野は違えども多くの刺激を与えてくれるプログラムばかりでした。

2日目のシンポジウム「生涯学をいかに社会実装するか？」では、研究が社会実装された南三陸の方々の目線から貴重な話を伺いました。中でもシンポジウムで示されたオブザーバーという研究者の在り方は、自分にとって示唆に富むものでした。私が研究対象とする脳損傷に伴う認知機能障害は見えない障害であるからこそ、障害に関する知識を広く社会に伝える必要性があると考えていますが、一方的な研究成果の喧伝では知識は浸透しません。したがって双方向の関係を前提とする助言者であるという心構えを持つことは、今後私自身が研究成果を社会に還元する上で非常に重要だと感じました。

様々なプログラムの中で個人的に特に印象深かつ

たのは、ポスター発表のプログラムです。私はこれまで参加した学術会議が総じてオンライン開催となり、今回が初めての「現地での」ポスター発表であったため、本番までは不安も大きいものでした。しかし実際に他の研究者の方と言葉を交わすと想像以上に議論は盛り上がり、研究に対する理解が深まると共に、これまで無いほどに自らの研究に対する誇らしさや楽しさが強く感じられました。また、研究者および臨床家としてのビジョンが未熟な私にとって、多様な場所、立場で研究に従事する方々との交流は、今後の幅広い可能性を知ることにも繋がり、大変有意義な時間でした。

こうして短くも充実した領域会議の2日間は、様々なプログラムを通して私に研究への多大な「原動力」を与えてくれました。研究を続ける先に待ち受けるのは楽しみだけではなく、苦しみも多いですが、領域会議のおかげで今では沸々と研究への意欲が沸き上がっています。素晴らしい領域会議をありがとうございました。

増田柚衣
(京都大学大学院人間・環境学研究科
博士課程2回)

受賞報告

「生涯学」プロジェクトの一環として推進された研究が、その成果を学界に認められ、各学術団体の定める賞を授与されました。ここにその概要を報告するとともに、受賞研究者の所感を紹介します。

受賞 日本心理学会第17回国際賞(奨励賞)

日高聡太(A01認知心理班研究分担者／総括班研究員)

授与者：(公社)日本心理学会
授与決定：2022年4月12日
受賞講演：2022年9月8日 授与式：2022年9月10日(日本心理学会第86回大会)

所 感

「より良く生きる」を探索する

「生涯学の創出」プロジェクトに、統括班およびA01班として参画しております。今年度、「日本心理学会第17回国際賞(奨励賞)」を受賞いたしました。本記事でそのご報告と私自身のことを紹介する機会を頂戴しました。

私は人の知覚・認知について研究しています。特に、目や耳など複数の感覚が組み合わさる形で知覚・認知が成立する過程、多感覚相互作用に関して興味を持っており、その研究業績を評価いただいたことが今回の受賞につながりました。一方、私が多感覚相互作用の研究を始めたきっかけは、東北大学大学院在籍時の指導教員(行場次朗先生)が大型の研究プロジェクト(「マルチモーダル感覚情報の時空間統合」)に参画するお供をしたという、完全に受動的なものでした。その際、「生涯学」プロジェクトの設立にも多大な貢献をされた杉田陽一先生に初めてお目にかかりました。当時博士後期課程1年であった私は、自分がやっていることは正しいのか、一人前になれるのかと悩む日々を送っていましたが、世界的にも著名な一流の研究者である杉田陽一先生に

目をかけていただき、「お前はそのままでもいいんだ」と励ましていただきました。プロジェクトの代表であられた鈴木陽一先生、現在「生涯学」プロジェクトでA01班代表をされている寺本渉先生を始め、関係者の方々に大変良くしていただいたことで、自信をもって楽しく研究できるようになりました。そしていつしか多感覚相互作用が私の大切な研究領域となっていました。なお、「生涯学」プロジェクトの代表をされている月浦崇先生とも、杉田陽一先生とのご縁で現在一緒にお仕事をさせていただいております。

多感覚相互作用に関する研究および「生涯学」プロジェクトを通じて感じることは、人は様々な工夫をしながら生涯成長する生き物だということです。例えば我々は相手の声が聞こえづらい場合は口の動きを手がかりにするなど複数の感覚の情報を利用しますが、加齢により目や耳など感覚機能が衰えて行く中でこのような多感覚相互作用の機能をより活用しているようです。また計算や暗記などの情報処理に関わる能力(流動性知能)は30代頃にピークを迎える一方、知識や経験に関わる能力(結晶性知能)は生涯にわたって向上・維持すると言われています。また、運動習慣や知的好奇心を持つことで、認知機能が向上・維持されるようです。「生涯学」プロジェクトに関わるなかで、幼少期から高齢期に至る様々な過程で、ライフイベントや震災などの自然災害により心身の健康を脅かす事柄が生じること、その際に人とのつながりが健康の維持・増進につながることも学んでおります。

私自身も常に知的好奇心を持ちながら「生涯学」プロジェクトに関わり、また皆さまとの交流を通じて、自分自身を含めて人が心身の健康を保ちながら「より良く生きる」ために必要なことを探索していきたいと思います。

日高聡太(立教大学現代心理学部 教授)



杉田先生との写真。杉田先生は前列左。前列右は寺本先生、後列左端が筆者

受賞

日本認知心理学会2022年度独創賞 「百寿者の認知機能の研究」

権藤恭之(公募班A04-L104研究代表者)

授与者：日本認知心理学会
授与発表：2022年6月28日
受賞講演：2022年10月16日(日本認知心理学会第20回大会)

所 感

百寿者研究について

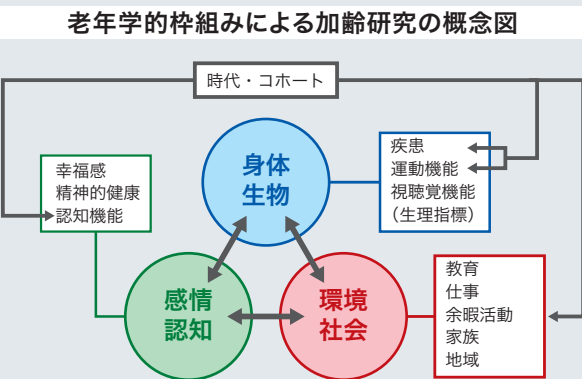
百寿者(Centenarian)とは100歳以上の方々を指す造語です。私は、1998年に心理学の立場から百寿者の研究に携わることになり、そして現在もSONIC(Septuagenarian, Octogenarian, Nonagenarian Investigation with Centenarian)という百寿者を視野に入れた研究を行っています。百寿者にこだわり研究を続ける理由は自分自身でも分かりません。今回、「百寿者の認知機能の研究」で認知心理学会の独創賞をいただいたことでその理由を改めて考えました。受賞した研究の内容は百寿者における認知症の有病率に関する研究レビューとその関連要因に関する考察、そして百寿者の認知機能評価法の開発に関するものです。20年近く前の研究であり、今から見返すといささか時代遅れの感は否めません。しかし、その時の経験や考えたことは、今も私の「研究のベース」として残っています。

調査では、数多くの百寿者の方々やご家族にお会いして直接お話を伺うことができました。正確に数えたことはありませんが、500人は下らないと思います。私の役割は認知テストとしてMMSEを実施し、幸福感やパーソナリティの尺度を尋ね、過去の経験を聞くことでした。1日平均2人、多くても3人にお会いするのが限界でしたが、その分じっくりおひとりおひとりのお話を伺うことができました。大変お元気で、すべての検査を終えた後に、子供の頃からの人生を話してくださる方もいれば、全く意識のない方もおられました。その場合は周りの人から可能な限りの情報を集めました。20年前は今と違い親子で長年同居されている方も多く、ご家族からもさまざまなエピソードを伺うことができました。訪問調査は、人間の「生涯」を凝縮して疑似体験できる稀有な経験でした。生老病死に関連する悲喜交々、人生の波乱万丈、そして、人間の実存について考えることができました。中でも、「心身機能の低下によってさまざまな制限のある生活を送っているにも

関わらず幸福感が保たれている」百寿者の方々にお会いできたことの影響は大きいものでした。

加齢は単に衰退のプロセスではなく、様々な資源の喪失(例：物忘れが増える)とそれを何からの方法で補償する能力(例：メモを取るようにする)の発達のダイナミクスにより、適応的に幸せに生きるプロセスです。加齢の究極の状態ともいえる百寿者を見ると、自らの尊厳が傷つくことにもつながる周囲からの補償の増加に対して、うまく折り合いがつけられていると感じることが多いのです。私は、現在加齢と幸福の関係を老年学の枠組みによって総合的にとらえられないかと模索しています(図)。このような大風呂敷を広げると研究としてまとめ上げるのは困難と思われる方も多いでしょう。確かにそのとおりです。しかし、百寿者を研究してしまうと、無謀な挑戦をすることが止められないのです。私を百寿者の研究に誘(いざな)ったDr.Poonによると、“Centenarians are charming.”とのこと。私にとって百寿者は、希望と絶望が表裏一体となった鏡のようです。鏡には自分自身そして社会が映っています。自分も含め今後ますます進行する超々高齢社会を幸福長寿社会にできるか否かは、鏡のどちらの面に焦点を当てるかによって変わるでしょう。

権藤恭之(大阪大学人間科学研究科 教授)





地域が誇る ブランド米づくりの経緯に学ぶ ——地域学習の実践例を訪ねて

社会教育班代表の石井山竜平さんはこれまで、学校以外の場所で人々が自発的に取り組む「生涯学習」が、人々の人生をいかに支え、充実したものにするかを研究してきました。とりわけ、地域ぐるみで人々が学習を重ねていく事例に注目し、東北各地で調査しています。そうした地域の一つ、宮城県の鳴子を石井山さんがしばらくぶりに訪ねました。

「ゆきむすび」開発の 背景にあった地域学習

美しい山に四方を囲まれた、絵に描いたような山間の地に田んぼが広がる。この田でとれる米は冷めてもおいしいことで評判の品種「ゆきむすび」。米作りには不利とされる寒冷な山間地で作られているにもかかわらず、市場の倍以上の価格で受注販売される高品質な希少米だ。

「鳴子の人は十数年前にこの品種を自分たちの手で生み出し、ブランド米へと育て上げました。外の有識者や支援者の手を借りつつ、地域の人々が主体的に様々な学習を重ねた結果です。ここにはそうした『地域学習』のモデルというべき姿があるんです」

もし全国の地域学習の実践例を集めた教科書が作られるとしたら、と石井山さんは続ける。「私なら、この『鳴子の米プロジェクト』（以下「米プロ」）を、東北を代表する事

例の一つとして紹介するでしょう。今日はあらためて『教科書』を読み直したいという思いで、米プロの中心的存在のお一人である上野健夫さんにお話を伺いに来ました」



事例を研究するフィールドワークという一般的なには研究者が関係者にインタビューする手法をイメージするが、石井山さんの調査はいささかスタイルが異なる。

「主に、当事者に講演や対話をさせていただく学習会を自身で企画して、研究者や関心を同じくする人にも聴いてもらい、様々な立場の人同士の対話を通して理解を深める、という形をとっています。また、学習会の準備としてお話を伺う過程でも学ばせていただくことは多いです」

自分一人で聞きとり、記録を仕上げ、発信するだけではなく、そのプロセスで学びうるものを多くの人と共有し広げていく「実践」は、社会教育研究者としての自己研鑽でもある、と石井山さんは言う。

「日本各地から鳴子の公民館に米プロの方のお話を聴きに来てもらったこともあれば、東京に米プロの方と出向いて学習会を行なったこともありました。JICAの事業で、アフガニスタンやパキスタン、ミャンマーなどからいらしたノンフォーマル教育を推進する立場の方々を鳴子にお連れし、米プロについて学んでいただいたこともあります」

鳴子はほかの地域と 何が違ったのか

一方、今日はこれまでのスタイルと少し異なり、一対一で上野さんのこれまでとこれからを伺う機会となった。石井

山さんは上野さんにこう尋ねた。

「鳴子の米プロジェクトは、『地元学』の提唱者である結城登美雄さんの提案によるものとしても知られていますね。ただ、外部からいかに有名な識者や一流のコンサルタントが来ても、実際には地元の人が本当に望む地域復興にはならなかったり、そもそも地域が動かなかった、というケースは枚挙に暇がありません。そうした地域と鳴子では、何が違うと思われますか？」

上野さんはほとんど迷いなく、しかし言葉を選びながらこう答えた。

「最初からブランド米ありきの話ではなかったんです。人口減少や観光客の減少が進む鳴子をどう盛り上げていくかを、役場の人や農家に限らず、観光業や飲食業など鳴子の様々な業種の人々が集まって勉強会を重ねてきた。何をするかを考え、行動に移し、試行錯誤するのは、あくまで自分たちです。それに対して、結城先生を始め、外の広い世界を知っていらっしゃる方々からアドバイスをいただく、という形を心がけてきました」



石井山さんはその背景に、鳴子という地域が醸成してきた連帯の歴史を見ている。

鳴子の人々はもともと、不利な条件での米作りに苦勞しながらも、ともに考え、試行錯誤しながらその厳しさ乗り越えてきた。そうした蓄積が地域に存在していたことで、「経済活性化のために特産品をつくろう」といった目の前の課題ではなく、より根本的な「自分たちの暮らしをどう維持し、どう良くしていくか」という問題意識に、人々が自分たちの意志で取り組むことができたのではないかと石井山さん

鳴子の米プロジェクトから生まれた、山間地に適した低アミロース米「ゆきむすび」のおにぎりを販売する「むすびや」。東日本大震災で元の施設は倒壊するも、再開を望む多くの声をうけ、クラウドファンディング等の資金も得ながら、2017年4月復活した



低アミロース米の特性を最大に活かした食べ方の一つが「おむすび」。それを地元の食文化を支えてきた工人作の桶に盛る。自分たちが提供しているのは「米」ではなく「ごはん」（食文化）であると、思考を転換させることで、「作り手」と「食べ手」の新たな関係づくりが目指されてきた



んは考えている。

「だからこそ、良い品種ができれば作って農協に出して終わりではなく、公民館に住民の方々が集まってどう炊けばおいしく食べられるか実験をしたり、鳴子温泉郷の宿の食事でゆきむすびを売りにしたり、という地域ぐるみの動きになり、それがメディアにも取り上げられて評判が評判を生む、という循環が生まれたのです」と石井山さんが深くうなずくと、上野さんは言葉を継いだ。

「低アミロースのゆきむすびは、冷めてもおいしいことが最大の長なんす。その良さを味わってもらうために、米プロとしてアンテナショップを立ち上げ、おむすびを販売しています」

自身も農業を営む上野さんは20年以上前から、鳴子の農産物や木工品の価値を再発見し、体験を通じて伝える会を主催してきた。これも鳴子の貴重な「蓄積」の一つだろう。

「個人」ではなく、 個と個の「関係」に注目

アンテナショップ『むすび屋』で供されるおむすびは、鳴子の職人の手になる美しい木桶に収まっている。上野さんから勧められておむすびに手を伸ばし、石井山さんが



鳴子の米プロジェクト事務局長、上野建夫さんのご自宅にて（2021年11月19日）

今日を振り返った。

「一般に『教育』は、個人の資質を高めることがその役割だと言われます。しかし個々人の力は万能ではなく、人間の生涯には加齢や障害などの制約がつきものですし、災害に見舞われることもある。そのような局面で重要なのは、人々がほかの人とのつながりの中で生きやすい環境をつくる営みではないでしょうか。社会教育学は、このような『個と個の関係の質を上げる』ことの意味を追求する学問だと私は思っています」

そして「人々の関係性の質」が見えやすいのは、人口が集積している都市部ではなく、むしろ人口減少がすすむ、鳴子のような地方だ、と石井山さんは言う。高齢化や過疎化に悩む地域、政治や行政主導の震災復興への不安を抱える地域も多いが、その分、地域の人々の意志から多様な実践が生まれている。

「そのような事例に学び、多くの人と共有し、そうした実践が育まれやすい条件とは何かを考え、提案し続けるのが、私のライフワークです」

東北の様々な地域で練り広げられてきた学習の特質を可視化しようとする石井山さんの研究は、ほかの研究者やよその地域の人だけでなく、おそらくその地域の人にとっても、人々が共同で取り組む学習の役割を再認識したり再発見する機会になるだろう。

2021-2022年度 活動報告

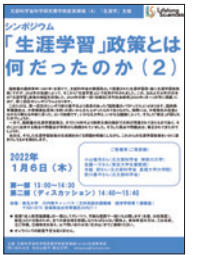
情報提供期間：2021年12月21日～2022年12月20日

2022年1月6日 13:00—15:40

アウトリーチ

D01 シンポジウムを開催しました
「「生涯学習」政策とは 何だったのか(2)」

登壇者(発言順)：小山竜司(元文部科学省 神奈川大学)、佐藤一子(東京大学名誉教授)、寺脇研(元文部科学省 星槎大学大学院)、前川喜平(元文部科学省) 東北大学川内南キャンパス



2022年1月22日 13:00—14:30

若手研究者育成

総括 「英語プレゼンテーション・ワークショップ」を開催しました
オンライン

2022年2月1日・11日・15日・3月2日 16:00—18:00

若手研究者育成

C01 レクチャーシリーズ
「AY2021 Online Lecture Series on Lifelong Sciences」を開講しました

1st Lecture
Lifelong Sciences & fieldwork I: Quantitative and qualitative approaches in fieldwork
Aynalem Megersa, Center for Gender Studies, Addis Ababa University, AAU

2nd Lecture
Lifelong Sciences & fieldwork II: Life-history approach in fieldwork
Getaneh Mehari, Dept. of Social Anthropology, College of Social Science, AAU

3rd Lecture
Lifelong Sciences & fieldwork III: Sounds, music instruments, and performance
Mamo Hebo, Dept. of Social Anthropology, College of Social Science, AAU

4th Lecture
Lifelong Sciences & fieldwork IV: Higher education and outreach activities in Ethiopia
Gebre Yntiso, AAU
(使用言語：英語) オンライン



2022年2月1日

公募 受賞

一般社団法人電気学会にて、技術委員会奨励賞を受賞しました
寺岡諒(公募班A04-L108 研究代表者)

2022年2月23日 14:00—18:00

学術集会

C01 国際ワークショップ
「Lifelong Sciences and Anthropological Studies」を開催しました
(使用言語：英語) オンライン



2022年3月1日

領域全体 アウトリーチ

ニュースレター2022Marchを発行しました

2022年3月5日

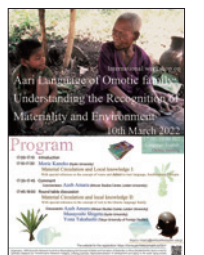
領域内交流

第3回領域会議(2021年度第2回)を開催しました →詳細はp.20-23

2022年3月10日 17:00—19:00

学術集会

C01 国際ワークショップ「Aari Language of Omotic family: Understanding the Recognition of Materiality and Environment」を共同開催しました
(使用言語：英語) オンライン



2022年3月12日 17:00—18:00

C01

学術集会

「Round-table talk on Fieldwork in Ethiopia」を開催しました
(使用言語：英語) オンライン[youtube配信]

2022年3月23日 13:00—14:30

B01
B02
B03

学術集会

社会学分野合同研究集会を開催しました
参加：B01班、B02班、B03班、B03-L101班、B03-L102班
(使用言語：日本語) オンライン

2022年4月18日 11:00—12:00

C01

学術集会

研究打ち合わせを実施しました
(使用言語：日本語) オンライン

2022年5月19日

B02

アウトリーチ

テレビ番組に出演し、教育政策の解説・提言を行いました
テレビ朝日「羽鳥慎一モーニングショー」において、生涯学での研究をふまえて教育政策について解説し、「発達的基础は幼児期にあり、質の高い幼児教育は子どもの発達にポジティブな効果がある。保育士の配置基準の改善などが重要だ」と提言しました。
柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2022年5月25日 18:30—20:00

公募

学術集会

第3回老いと死の研究ラボ—幸福長寿研究会—勉強会を開催しました
「地域行政における高齢者の健康寿命延伸に向けた取り組み」
樺山舞(大阪大学大学院 医学系研究科)
大阪大学大学院人間科学研究科東館2階207 ユメヌホール
(使用言語：日本語) 対面

2022年5月28日 15:00—17:30

C01

学術集会

第5回技能習得と発達についての人類学的研究研究会を開催しました
15:00—15:10 主旨説明ほか 金子守恵
15:10—16:10 研究発表Ⅰ「エチオピア南西部保健普及員の活動による住民の健康的な生活への影響とコミュニティにおける近代医療システムの受容に関する実践的地域研究——COVID19パンデミックに関する保健普及員の役割と住民の行動変容」
鈴木功子(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・博士課程(一貫制))
研究発表Ⅱ「多様な生き方を受容するまちづくり——「ともに暮らす街—わかぞのインクルーシブ・コミュニティ(WinC)構想」の実践」
小野瑠夏(北九州市立大学大学院社会システム研究科・修士課程)
(使用言語：日本語) オンライン



2022年5月29日

公募

受賞

日本感情心理学会第30回大会で大会発表賞(優秀研究賞)を受賞しました
鈴木敦命(公募班A04-L104 研究代表者)

2022年6月18日・19日

総括

学術集会

日本科学振興協会(JAAS)第1回総会・キックオフミーティングにてポスター発表を行いました
月浦崇(領域代表者)

2022年6月22日

公募

アウトリーチ

インタビュー記事が毎日新聞デジタルに掲載されました
「“若気の至り”に後から気づく理由とは?「結晶性知能」の真実」
西田裕紀子(公募班A04-L110 研究代表者)

2022年6月28日

公募

受賞

日本認知心理学会2022年度独創賞を受賞しました →詳細はp.24-25
「百寿者の認知機能に関する研究」
権藤恭之(公募班A04-L104 研究代表者)

2022年6月28日

B01

学術集会・アウトリーチ

内閣府主催「令和4年度 男女共同参画社会づくりに向けての全国会議」にパネリストとして参加しました
筒井淳也(B01 高年社会参加班 研究代表者)

2022年7月6日 18:30—20:00

公募

学術集会

第4回老いと死の研究ラボ—幸福長寿研究会—勉強会を開催しました
「高齢者のプチ就労の企画・開発について——宝塚市から始まった無理なくハタラク仕組みづくりの今後」
遠座俊明(大阪ガスネットワーク(株) エネルギー・文化研究所)
大阪大学大学院人間科学研究科東館2階207 ユメヌホール
(使用言語：日本語) ハイブリッド

2022年7月7日

A01
総括

受賞

日本心理学会第17回国際賞(奨励賞)を受賞しました →詳細はp.24-25
日高聡太(A01 認知心理班 研究分担者・総括班 研究者)

2022年7月19日 16:30—18:40

C01

若手研究者育成

AY2022 Online Lecture Series on Lifelong Sciencesを開催しました
16:30—16:40 Introduction, Morie Kaneko, Kyoto University
16:40—17:40 Mamo Hebo Lecture on the Lifelong Sciences & fieldwork V: Research proposal and research plan
17:40—18:40 Comments on research proposals
(使用言語：英語) オンライン



2022年7月27日

B01

若手研究者育成

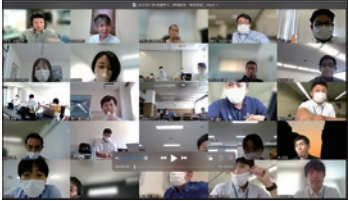
テレビ番組に出演し、育児休業制度に関するコメントを述べました
NHK「おはよう日本」において、日本で育児休業制度が進まない理由と対策についてコメントしました。
筒井淳也(B01 高年社会参加班 研究代表者)

2022年7月28日 11:00—17:00

D1

アウトリーチ

東北大学社会教育主事講習に講師として参加しました
→詳細はp.18-19
「生涯学」プロジェクトメンバー担当講義
11:10—12:40 生涯学習支援論14 月浦崇・寺本渉
13:40—15:10 生涯学習支援論15 筒井淳也・柴田悠
15:20—16:50 生涯学習支援論16 金子守恵・倉田誠



2022年8月4日 14:00—17:00

C02

学術集会

「第4回C02班モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究研究会」を開催しました
14:00 研究班連絡・研究状況報告
14:20 研究発表Ⅰ「生理用品と女性の生涯——パプアニューギニアの事例からの展望」 新本万里子(広島市立大学)
15:00 質疑応答
15:20 研究発表Ⅱ「子どもの運搬をヒトとモノの関係から探る——乳母車・おんぶ・抱っこ」 安井真奈美(国際日本文化研究センター)
16:00 質疑応答
16:20 全体討論
17:00 閉会
東京医科大学・西新宿キャンパス
(使用言語：日本語) ハイブリッド

2022年8月4日

B01

学術集会

研究会を開催しました

発表：「引退・健康に関する計量的分析」水落正明(南山大学総合政策学部)
(使用言語：日本語) [オンライン](#)



2022年8月18日

領域全体

募集

「生涯学」後期2年間の「公募研究」の募集を開始しました

2022年8月20日

公募

アウトリーチ

生涯学習講座を担当しました

川西市生涯学習短期大学レフネック「こころの未来学科」生涯学習講座
「こころを動かされること」
中山真孝(公募班E01-L103 研究代表者)

2022年8月27日・28日

領域全体

領域内交流

第4回領域会議(2022年度第1回)を開催しました →詳細はp.20-23

宮城県南三陸ホテル観洋 [ハイブリッド](#)

2022年8月28日

B02

アウトリーチ

インタビュー記事が朝日新聞デジタルに掲載されました

「保育政策の現状と課題、政策提言」
柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2022年9月5日

B02

アウトリーチ

インタビュー記事が新聞に掲載されました

朝日新聞2022年9月5日付朝刊
「待機児童ゼロ・幼保無償化 保育士の負担軽減と待遇改善が先」
柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2022年9月6日

B02

アウトリーチ

研究成果の一部を雑誌記事として発信しました

「こども家庭庁」は親子を救うか
「Voice」2022年10月号 pp.148～155 PHP研究所
柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2022年9月15日 16:00—18:30

C01

学術集会

The 2nd Lifelong Sciences Research Seminarを開催しました

16:00—17:00 Fieldwork report on the outsourcing of childcare to formal care in Ethiopia[tentative]
Addisu Meseret, Kyoto University
17:00—17:30 Comments on the presentation
Mamo Hebo, Addis Ababa University/ Institute of Developing Economies (IDE-JETRO)
17:30—18:30 General discussions
京都大学アフリカ地域研究資料センター共同棟504セミナー室
(使用言語：英語) [ハイブリッド](#)

2022年9月16日 14:00—17:00

C01

学術集会

第76回日本人類学会大会連合大会で講演を行いました

「モノを作るヒト」
金子守恵(C01技能発達班 研究代表者)
京都産業会館ホール北室(A会場)



2022年9月16日 14:00—16:30

C01

学術集会

The 3rd Lifelong Sciences Research Seminarを開催しました

14:00—15:00 Fieldwork report on the community road construction, the history of road disasters, and life histories in Ethiopia
Kassahun Yemene, Kyoto University
15:00—15:30 Comments on the presentation
Mamo Hebo, Addis Ababa University/Institute of Developing Economies (IDE-JETRO)
15:30—16:30 General discussions
京都大学アフリカ地域研究資料センター共同棟504セミナー室
(使用言語：英語) [ハイブリッド](#)

2022年9月17日 16:00—17:30

総括

若手研究者育成

「英語プレゼンテーション・ワークショップ」を開催しました

(使用言語：英語) [オンライン](#)

2022年9月24日

公募

アウトリーチ

生涯学習講座を担当しました

川西市生涯学習短期大学レフネック「こころの未来学科」生涯学習講座
「認知を鍛えることはできるのか？」
中山真孝(公募班E01-L103 研究代表者)

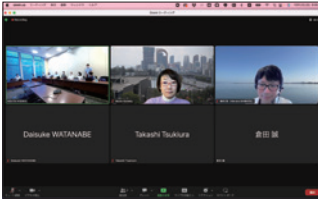
2022年10月1日・2日

総括

領域内交流

「領域内交流プログラム「生涯学」ブレスト会議」を開催しました

10月1日 座長：日高 聡太
Active participants：渡邊大輔、菊谷まり子、朴白順
13:00—13:30 「生涯学」の今後の研究活動方針について
月浦崇(領域代表・A02生理心理班 研究代表者)
13:30—14:10 「生涯学の刷新」の到達目標とアプローチ①
寺本渉(A01知覚・認知心理班 研究代表者)・松井三枝(A03臨床心理班 研究代表者)
14:35—15:55 「生涯学の刷新」の到達目標とアプローチ②
筒井淳也(B01高年社会参加班 研究代表者)・柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)・金子守恵(C01技能発達班 研究代表者)・倉田誠(C02ヒトモノ班 研究代表者)
16:15—16:40 「生涯学の刷新」の到達目標とアプローチ③
石井山竜平(D01社会教育班 研究代表者)
10月2日
10:00—12:00 ブレーンストーミング「生涯学の刷新」の到達目標・アプローチおよび今期に必要な取り組みについて
立教大学池袋キャンパス12号館第1会議室
(使用言語：日本語) [ハイブリッド](#)



2022年10月27日 15:00—17:00

C01

若手研究者育成

The 4th Lifelong Sciences Research Seminarを開催しました

15:00—15:10 Introduction
15:10—16:10 Living and Learning in Kyoto (Japan): A modest reflection on my experience (and conversation with young students from Africa)
Mamo Hebo, Addis Ababa University/Institute of Developing Economies (IDE-JETRO)
16:10—17:00 Questions and Comments
稲盛財団記念館3階大会議室
(使用言語：英語)

2022年10月29日 10:00—11:30

公募

アウトリーチ

リベラルアーツカフェVol.114で講演を行いました

「エイジング・イン・プレイス～住み慣れた地域で暮らし続けること～」
江口洋子(公募班E01-L106 研究代表者)
社会福祉法人丹緑会 介護付有料老人ホーム 新
(使用言語：日本語) [ハイブリッド](#)

2022年10月29日

B02

アウトリーチ

テレビ番組に出演し、子育て支援について解説しました

NHK・Eテレ「すくすく子育て」において、子育て支援について解説しました。
「親が心に余裕を持って子どもと接するのが、子どもの発達にもいいのです。そのために、親がきちんと休まなくてはいけません。」
柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2022年11月1日

公募

受賞

日本医師会において、医学研究奨励賞を受賞しました

小池進介(公募班 A04-L105 研究代表者)

2022年11月5日 14:00—15:30

総括

アウトリーチ

一般公開シンポジウムを開催しました

『「生涯学」の挑戦——高次脳機能障害から見える新しい生涯観』

主催：文部科学省科学研究費助成事業 学術変革領域研究(A)「生涯学」総括班
後援：(一社)日本高次脳機能障害学会、日本認知心理学会神経心理学部会、
日本パーソナリティ心理学会
京都大学医学部創立百周年記念施設 芝蘭会館稲盛ホール2F／ウェビナー[Zoom]
(使用言語：日本語) [ハイブリッド](#)



2022年11月12日・13日

総括

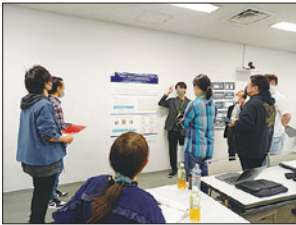
若手研究者育成

若手研究者の会

～英語ポスター発表と若手の悩みについての

グループディスカッション～を開催しました

東洋大学白山キャンパス
(使用言語：日本語・英語)



2022年11月15日 15:00—17:00

C01

学術集会

The 5th Lifelong Sciences Research Seminarを開催しました

15:00—15:10 Introduction
Kaori Fushiki, Taisho University
15:10—15:30 Hiragasy, laughter, and cultural identity
Faniry, Ranaivo Rahamefy, University of Antananarivo
15:45—16:15 Traveling performing arts in Japan
Chie Kamino, National Museum of Ethnology
16:15—16:50 General discussions
16:50—17:00 Closing remarks
Morie Kaneko, Center for African Area Studies, Kyoto University
(使用言語：英語)



2022年11月19日 9:00—11:35

C01

学術集会

The 6th Lifelong Sciences Research Seminarを開催しました

9:00—9:10 Introduction
Eunji Choi, Center for African Area Studies, Kyoto University
9:10—9:55 Terminal is Our Life: Job Mobility and Adaptive Strategy of
Transport Workers in Addis Ababa
Eunji Choi, Center for African Area Studies, Kyoto University
10:00—10:45 Thinking for Convivial Infrastructure: A Case Study of Jeepney in
Metro Manila
Zenta Nishio, Graduate School of Core Ethic and Frontier Sciences,
Ritsumeikan University
10:50—11:35 Transport Labor, Corruption, and Everyday Survival in an African Megacity
Daniel Agbibo, African and African American Studies, Harvard University
11:35—11:40 Closing remarks
Masayoshi Shigeta, Center for African Area Studies, Kyoto University
(使用言語：英語) [ハイブリッド](#)



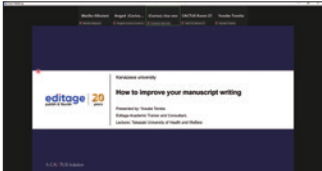
2022年11月26日 13:00—14:00

総括

若手研究者育成

第2回英語論文の書き方セミナー(2022年度第1回)を
開催しました

「HOW TO IMPROVE YOUR MANUSCRIPT WRITING」
講師：CACTUSコミュニケーションズ
(使用言語：日本語・英語) [オンライン](#)



2022年12月3日

公募

受賞

第46回日本高次脳機能障害学会学術総会で優秀ポスター賞を受賞しました

三浦佳代子(公募班E01-L107 研究代表者)

2022年12月7日 18:30—20:00

公募

学術集会

第6回老いと死の研究ラボー幸福長寿研究会—勉強会を開催しました

「成人指定R-65：オトナの心理学2022」
Masami Takahashi(イリノイ州立ノースイースタン大学心理学部)
大阪大学大学院人間科学研究科本館5階51講義室 キャンピーホール
(使用言語：日本語) [ハイブリッド](#)

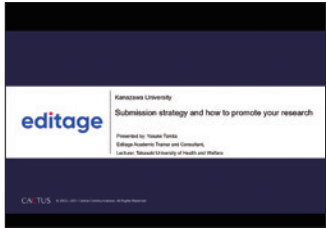
2022年12月14日 16:00—17:00

総括

若手研究者育成

第3回英語論文の書き方セミナー(2022年度第2回)を
開催しました

「Submission strategy and how to promote your research」
講師：CACTUSコミュニケーションズ
(使用言語：日本語・英語) [オンライン](#)



2022年12月16日

公募

受賞

電子情報通信学会 HCGシンポジウム2022において、
優秀インタラクティブ発表賞を受賞しました

三浦貴大(公募班 E01-L1010代表)



2022年12月17日

A03

受賞

北陸心理学会第57回大会において、大会発表賞を受賞しました

滝口雄太(A03臨床心理班 研究員)



2022年12月22日・23日

A03

学術集会

電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会において、
研究成果を報告しました

招待講演：杉浦元亮(東北大学加齢医学研究所)
報告者：菊谷まり子(A03臨床心理班 研究分担者)
東北大学 電気通信研究所 通研本館6階大会議室
[ハイブリッド](#)

2023年2月12日

C02
D01

アウトリーチ・領域内交流

コンファレンスに参加し、生涯学に関わる講演とディスカッションを行いました
共に学び、生きる共生社会コンファレンス東北ブロック
「ちがう、かわかる、かわる～障害のある人とない人がともに」

1 おはなし「ゆさぶれ!? わたしたちの既存の『生涯』観と『障害』観」
2 ディスカッション「ミライのショウガイガクシュウ」
登壇者：倉田誠、石井山竜平、ほか
主催：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン、文部科学省
せんだいメディアテーク [ハイブリッド](#)



2023年3月19日・20日

領域
全体

領域内交流

「生涯学」国際シンポジウムを開催しました →詳細はp.43

京都大学医学部創立百周年記念施設 芝蘭会館
[ハイブリッド](#)

業績一覧

論文

Shimpuku, Y., Kaneko, M., Nishi, M., Aoyama, T., Taniguchi, K., Mwilike, B., Kaba, M. 2021. Report of the International Workshop on Medical ZAIRAICHI, A Medical-Local Knowledge on Research Network. *Journal of African Studies*. 99: 21-28.

筒井淳也. 2021. 家族の変動と親介護経験：NFRJ18データの分析から, 第4回全国家族調査(NFRJ18)第二次報告書 3：1-14.

松井三枝. 2022. 精神・神経疾患の認知予備力についての検討. *認知神経科学* 23(3-4)：103-108.

松井三枝. 2021. 統合失調症における認知機能障害とその治療の神経基盤. *臨床精神医学* 50(12)：1291-1302.

小山竜司. 2022. 臨教審のパラドックス. *月刊公民館* 776：39-41.

Turner, M., Ishihara, T., Beranek, P., Turner, K., Fransen, J., Born, P., Cruickshank, T. 2022. Investigating the role of age and maturation on the association between tennis experience and cognitive function in junior beginner to intermediate-level tennis players. *International Journal of Sports Science & Coaching* 17(5) 1071-1078.

月浦崇. 2022. ヒト記憶における加齢と社会的文脈の基盤となる神経メカニズム. *日本ロボット学会誌* 40：18-20.

Ishihara, T., Kyan, A. 2022. A narrative review of the relationship between early-life physical activity and later-life cognitive function. *The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine* 11(3): 137-147.

小山竜司. 2022. 会長や委員の人選. *月刊公民館* 777：38-41.

Okazaki, S., Kimura, R., Otsuka, I., Funabiki, Y., Murai, T., Hishimoto, A. 2022. Epigenetic clock analysis and increased plasminogen activator inhibitor-1 in high-functioning autism spectrum disorder. *PLOS ONE* 17(2): e0263478.

Ito, K., Okamura, T., Awata, S., Gondo, Y., Masui, Y., Inagaki, H., Kamide, K., Ikebe, K., Arai, Y., Ishizaki, T. 2022. Factors associated with psychological well-being among nonagenarians: Well-being in the era of 100 years of life. *Geriatrics & Gerontology International* 22: 364-366.

小池進介. 2022. 脳MRI研究による精神疾患の病態解明と臨床応用. *細胞* 54(2)：69-72.

小山竜司. 2022. 大統領手法と国民的議論. *月刊公民館* 778：44-47.

松田英子. 2022. タイプA行動パターンと悪夢症状の関連の検討——悪夢の頻度, 悪夢の苦痛度, および自殺念慮からの分析. *東洋大学大学院研究科紀要* 58：77-86.

松田英子, 松岡和生. 2022. 日本の大学生のコロナウイルス・パンデミックドリームの縦時的変化に関する質的研究——自粛生活と夢内容の関連の分析. *行動科学* 60：9-19.

松田英子, 松岡和生, 岡田斉. 2022. 自閉症スペクトラム障害の特性と夢の感覚および感情に関する予備的研究. *イメージ心理学研究* 19：1-9.

Matsuda, E. 2022. The Effect of Type A Behavior Pattern on Insomnia and Nightmare among Japanese University Students. *東洋大学社会学部紀要* 59(2)：99-110.

倉田誠. 2022. 生涯学におけるヒトモノ研究のねらいと展望. *ZAIRAIICHI* 4：9-13.

Yoshimoto, K., Shinya, M. 2022. Use of the Azure Kinect to measure foot clearance during obstacle crossing: A validation

study. *PLoS One* 11;17(3): e0265215.

Kawagoe, T. 2022. Overview of (f)MRI Studies of Cognitive Aging for Non-Experts: Looking through the Lens of Neuroimaging. *Life* 12(3): 416.

Matsuda, E., Kikutani, M. 2022. The interactive influence of life stressor and sleep disturbance on depression: A cross-sectional examination on Chinese and Japanese University Students. *SAGE Open* (J676): 1-13.

月浦崇. 2022. 社会的文脈におけるヒト記憶の神経基盤. *神経心理学* 38(1)：11-17.

金子守恵. 2022. 生涯学の創出における人類学的研究の課題. *ZAIRAIICHI* No.4：Lifelong Sciences Special Issue 01：1-7.

鈴木功子, 金子守恵. 2022. 高齢者の機能的状態に関する評価尺度の検討——身体機能・日常生活行動・社会的活動・認知機能・主観的健康観に関する評価尺度の先行研究レビュー. *ZAIRAIICHI* No. 4：Lifelong Sciences Special Issue 01：15-27.

Ebina, K., Matsui, M., Higuchi, Y., Suzuki, M. 2022. Premorbid intellectual ability in schizophrenia influence family appraisal related to cognitive impairments: A cross-sectional study on cognitive impairment and family assessments. *BMC Psychiatry* 22: 227.

濱貴子, 松井三枝, 蝦名昂大, 佐藤邦子, 石岡良子. 2022. コロナ禍における家事とメンタルヘルスの関係. *富山県立大学紀要* 32：99-116.

小山竜司. 2022. 「教育の自由化」論争. *月刊公民館* 779：44-47.

Uchida, S., Shimada, C., Sakuma, N., Kagitani, F., Kan, A., Awata, S. 2022. Olfactory function and discrimination ability in the elderly: a pilot study. *The Journal of Physiological Sciences* 72:8.

佐本英規. 2022. 檳榔と煙草とパンパイプ——ソロモン諸島アレアレの村で「胸が打つ」・「胸を打つ」ということ. *季刊民族学* 46(2)：40-47.

Nakagawa, T., Nishita, Y., Tange, C., Tomida, M., Otsuka, R., Ando, F., Shimokata, H. 2022. Does positive affect predict mortality and morbidity? A 19-year longitudinal study of middle-aged and older Japanese adults. *Journal of Research in Personality* 97: 104204.

Okazaki, S., Kimura, R., Otsuka, I., Tomiwa, K., Funabiki, Y., Hagiwara, M., Murai, T., Hishimoto, A. 2022. Epigenetic aging in Williams syndrome. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 63(12): 1553-1562.

西田裕紀子. 2022. 認知症発症の時代的推移. *老年社会科学* 44：43-50.

Kushima, I., Nakatochi, M., Aleksic, B., Okada, T., Kimura, H., Kato, H., Morikawa, M., Inada, T., Ishizuka, K., Torii, Y., Nakamura, Y., Tanaka, S., Imaeda, M., Takahashi, N., Yamamoto, M., Iwamoto, K., Nawa, Y., Ogawa, N., Iritani, S., Hayashi, Y., Lo, T., Otgonbayar, G., Furuta S., Iwata, N., Ikeda, M., Saito, T., Ninomiya, K., Okochi, T., Hashimoto, R., Yamamori, H., Yasuda, Y., Fujimoto, M., Miura, K., Itokawa, M., Arai, M., Miyashita, M., Toriumi, K., Ohi, K., Shioiri, T., Kitaichi, K., Someya, T., Watanabe, Y., Egawa, J., Takahashi, T., Suzuki, M., Sasaki, T., Tochigi, M., Nishimura, F., Yamasue, H., Kuwabara, H., Wakuda, T., Kato, A, T., Kanba,

S., Horikawa, H., Usami, M., Kodaira, M., Watanabe, K., Yoshikawa, T., Toyota, T., Yokoyama, S., Munesue, T., Kimura, R., Funabiki, Y., Kosaka, H., Jung, M.,, Kasai, K., Ikegame, T., Jinde, S., Numata, S., Kinoshita, M., Kato, T., Kakiuchi, C., Yamakawa, K., Suzuki, T., Hashimoto, N., Ishikawa, S., Yamagata, B., Nio, S., Murai, T., Son, S., Kunii, Y., Yabe, H., Inagaki, M., Goto, Y., Okumura, Y., Ito, T., Arioka, Y., Mori, D., Ozaki, N. 2022. Cross-disorder analysis of genic and regulatory copy number variations in bipolar disorder, schizophrenia, and autism spectrum disorder. *Biological Psychiatry* 92(5): 362-374.

Yoshida, Y., Ishizaki, T., Masui, Y., Arai, Y., Inagaki, H., Ogawa, M., Yasumoto, S., Iwasa, H., Kamide, K., Rakugi, H., Ikebe, K., Gondo, Y. 2022. Association of personality traits with polypharmacy among community-dwelling older adults in Japan: a cross-sectional analysis of data from the SONIC study. *BMC Geriatrics* 22(1): 372.

小山竜司. 2022. 55年体制的思考からの脱却. *月刊公民館* 780：42-44.

Kimura, Y., Akasaka, H., Takahashi, T., Yasumoto, S., Kamide, K., Ikebe, K., Kabayama, M., Kasuga, A., Rakugi, H., Gondo, Y. 2022. Factors Related to Preventive Behaviors against a Decline in Physical Fitness among Community-Dwelling Older Adults during the COVID-19 Pandemic: A Qualitative Study. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 19(10): 6008.

Teramoto, W. 2022. Age-related changes in visuo-proprioceptive processing in perceived body position. *Scientific Reports* 12: 8330.

Izumika, R., Cabeza, R., Tsukiura, T. 2022. Neural mechanisms of perceiving and subsequently recollecting emotional facial expressions in young and older adults. *Journal of Cognitive Neuroscience* 34(7): 1183-1204.

内田さえ. 2022. 嗅覚と認知症をつなぐ脳内コリン作動系——早期発見と予防を目指して. *自律神経* 59(2)：191-196.

小山竜司. 2022. 教育荒廃のなかでの基本答申. *月刊公民館* 782：48-50.

木村亮. 2022. 高い社交性を呈する希少疾患, ウィリアムズ症候群. *難病と在宅ケア* 28(4)：45-48.

泉家怜奈, 月浦崇. 2022. 表情認知の異なる処理レベルとその脳内メカニズム. *脳神経内科* 97(1)：1-6.

Watanabe, M., Miura, T., Matsuo, M., Sakajiri, M., Onishi, J. 2022. GoalBaural-II: An Acoustic Virtual Reality Training Application for Goalball Players to Recognize Various Game Conditions. *Lecture Notes in Computer Science* 13342: 79-88.

Konya, A. 2022. Four Stones: The Concept of Space and Time in Palauan Mythology. *Language and Linguistics in Oceania* 14: 22-42.

Chen, W.L., Nishita, Y., Nakamura, A., Kato, T., Nakagawa, T., Zhang, S., Shimokata, H., Otsuka, R., Su, K.P., Arai, H. 2022. Hemoglobin concentration is associated with the hippocampal volume in community-dwelling adults. *Archives of Gerontology and Geriatrics* 101: 104668.

内田さえ. 2022. 神経科学の基礎研究から認知的フレイルの早期診断への展開. *日本サルコペニア・フレイル学会誌* 6(1)：25-29.

柴田悠. 2022. 子育てと「家族の幸せ」——社会学の立場から. *家族研究年報* 47：13-28.

Matsuda, E. 2022. Relation between Obsessive-Compulsive Tendency and Sleep Disturbance of Japanese Undergraduates: Analysis of Insomnia, Nightmares, Dream Emotions, Dream Themes, and Sensory Modalities. *Japanese Journal of*

Behavioral Medicine 26(2): 115-124.

小山竜司. 2022. 新たな軸の発見. *月刊公民館* 783：47-50.

西田裕紀子. 2022. 加齢とともに成熟する能力. *保健の科学* 64：542-547.

権藤恭之. 2022. 加齢に伴って認知機能は低下するのか. *保健の科学* 64(8)：521-525.

Kasuga, A., Yasumoto, S., Nakagawa, T., Ishioka, Y., Kikuchi, A., Inagaki, H., Ogawa, M., Hori, N., Masui, Y., Choe, H., Muto, H., Kabayama, M., Godai, K., Ikebe, K. 2022. Older Adults’ Resilience Against Impact of Lifestyle Changes During the COVID-19 Pandemic. *Gerontology and Geriatric Medicine* 8: 1-6.

Martin, P., Gondo, Y., Lee, G., Woodard, J.L., Miller, L.S., Poon, L.W. 2022. Cognitive Reserve and Cognitive Functioning among Oldest Old Adults: Findings from the Georgia Centenarian Study. *Experimental Aging Research* 5: 1-13.

Ludyga, S., Ishihara, T. 2022. Brain structural changes and the development of interference control in children with ADHD: The predictive value of physical activity and body mass index. *NeuroImage: Clinical* 35: 103141.

Takiguchi, Y., Matsui, M., Kikutani, M., Ebina, K. 2022. The relationship between leisure activities and mental health: The impact of resilience and COVID-19. *Applied Psychology: Health and Well-Being*: 1-19.

Ishizaki, T., Masui, Y., Nakagawa, T., Yoshida, Y., Ishioka, Y.L., Hori, N., Inagaki, H., Ito, K., Ogawa, M., Kabayama, M., Kamide, K., Ikebe, K., Arai, Y., Gondo, Y. 2022. Construct Validity of a New Health Assessment Questionnaire for the National Screening Program of Older Adults in Japan: The SONIC Study. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 19(16): 10330.

Sato, K., Suzuki, F., Tsujiguchi H., Hara, A., Kannon,T., Muto, G., Hori, D., Miyagi, S., Suzuki, K., Nakamura, M., Takazawa, C., Kasahara, T., Tsuboi, H., Matsui, M., Tajima, A., Nakamura, H. 2022. Relationship between Social Capital and Depressive Symptoms: Differences According to Resilience and Gender in the Shika Study. *Journal of Affective Disorders Reports* 100421.

小山竜司. 2022. コペルニクスの転回の実価. *月刊公民館* 784：44-47.

石井山竜平. 2022. 日本の生涯学習政策30年を振り返るシンポジウム『「生涯学習」政策とはなんだったのか(2)』.(シンポジスト：佐藤一子, 寺脇研, 前川喜平), *東アジア社会教育研究* 27：76-92.

飯嶋秀治, 広瀬浩二郎. 2022. 視覚障害と信仰世界——触常者の行き方. *宗教研究* 96.2(404)：3-28.

Nishita, Y., Makizako, H., Jeong, S., Otsuka, R., Kim, H., Obuchi, S., Fujiwara, Y., Ohara, Y., Awata, S., Yamada, M., Iijima, K., Shimada, H., Suzuki, T. 2022. Temporal trends in cognitive function among community-dwelling older adults in Japan: Findings from the ILSA-J integrated cohort study. *Archives of Gerontology and Geriatrics* 102: 10478.

Ishihara, T., Robin, N., Naito, T., Murata, M., Crespo, M. 2022. Effects of the COVID-19 pandemic on professional tennis players’ match statistics: A large-scale population-based study. *Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports* 32(10): 1516-1518.

Matsumoto, K., Gondo, Y., Masui, Y., Yasumoto, S., Yoshida, Y., Ikebe, K., Arai, Y., Kabayama, M., Kamide, K., Akasaka, H., Ishizaki, T. 2022. Physical performance reference values for Japanese oldest old: a SONIC study. *BMC Geriatrics* 22:748.

Wada, M., Nakajima, S., Honda, S., Takano, M., Taniguchi,

K., Tsugawa, S., Mimura, Y., Hattori, N., Koike, S., Zomorodi, R., Blumberger, D.M., Daskalakis, Z.J, Mimura, M., Noda, Y. 2022. Reduced signal propagation elicited by frontal transcranial magnetic stimulation associated with oligodendrocyte abnormalities in treatment-resistant depression. <i>J Psychiatr Neurosci</i> 47(5): 325-335.	Hirokawa, K., Kasuga, A., Matsumoto, K., Omori, Y., Masui, Y., Nakagawa, T., Ogawa, M., Ishioka, Y., Inagaki, H., Ikebe, K., Arai, Y., Ishizaki, T., Kamide, K., Gondo, Y. 2022. Associations between salivary testosterone levels and cognitive function among 70-year-old Japanese elderly: a cross-sectional analysis of the SONIC study. <i>Geriatrics & Gerontology International</i> 22(12): 1040-1046.	著).『児童心理学・発達科学ハンドブック【第1巻】』. 福村書店, pp.892-957(翻訳：堀毛一也, 松田英子). 倉田誠. 2022. 「認知症診療における身体イメージの創出——画像診断によるアルツハイマー型認知症の描出と実体化」. 安井眞奈美, ローレンス・マルソー(編). 『想像する身体【下巻】身体イメージの未来へ』. 臨川書店, pp.270-289.	<i>affective wellbeing</i> . Lausanne: Frontiers Media SA. 内山伊知郎, 松田英子. (編著)2022.『公認心理士国家試験対策全科』金芳堂.
Hirai, M., Asada, K., Kato, T., Ikeda, T., Hakuno, Y., Ikeda, A., Matsushima, K., Awaya, T., Okazaki, S., Kato, T., Funabiki, Y., Murai, T., Heike, T., Hagiwara, M., Yamagata, T., Tomiwa, K., Kimura, R. 2022. Comparison of the Social Responsiveness Scale-2 among Individuals with Autism Spectrum Disorder and Williams Syndrome in Japan. <i>Journal of Autism and Developmental Disorders</i> .	Suzuki, A., Tsukamoto, S., Takahashi, Y. 2022. Generalized tendency to make extreme trait judgements from faces. <i>Royal Society Open Science</i> 9(11): 220172.	Chen, C., Yau, S.Y.S., Clemente, F.M., Ishihara, T. (Eds.) 2022. <i>The effects of physical activity and exercise on cognitive and</i>	筒井淳也. 2022. 第3章「年齢を重ねると夫婦は満足を深めるのか」. 西野理子(編著). 『夫婦の関係はどうかわっていくのか：パネルデータによる分析』. ミネルヴァ書房, pp.39-59.
笠井賢紀. 2022. 基盤型アソシエーションとしての講——滋賀県栗東市目川の伊勢講勘定帳を読み解く. 生活学論叢 41：15-29. 小山竜司. 2022. 国際的な論議との関係. 月刊公民館 785：44-47. Ludyga, S., Ishihara, T., Kamijo, K. 2022. The Nervous System as a Pathway for Exercise to Improve Social Cognition. <i>Exercise and Sport Sciences Reviews</i> 50(4): 203-212.	小山竜司. 2022. 政治的な風向きの変化. 月刊公民館 787：42-45.	● 国際学会	
Ishihara, T., Miyazaki, A., Tanaka, H., Matsuda, T. 2022. Association of Cardiovascular Risk Markers and Fitness with Task-related Neural Activity during Animacy Perception. <i>Medicine & Science in Sports & Exercise</i> 54(10): 1738-1750.	Leung, Y., Barzilai, N., Batko-Szwaczka, A., Beker, N., Boerner, K., Brayne, C., Brodaty, H., Cheung, S.L., Corrada, M., Crawford, J.D., Galbussera, A.A., Gondo, Y., Holstege, H., Hulsmann, M., Ishioka, Y.L., Jopp, D., Kawas, C.H., Kaye, J., Kochan, N.A., Lau, H.P.B, Lipnicki, D.M., Lo, J.W., Lucca, U., Makkar, S.R., Marcon, G., Martin, P., Meguro, K., Milman, S., Poon, L.W., Recchia, A., Ribeiro, O., Riva, E., Rott, C., Sikkes, S.A.M., Skoog, I., Stephan, B., Szewieczek, J., Teixeira, L., Tettamanti, M., Wilczy_ski, K., Sachdev, P. 2022. Cognition, function, and prevalent dementia in centenarians and near-centenarians: An individual participant data (IPD) meta-analysis of 18 studies. <i>Alzheimer's & Dementia</i> 1-11.	Kurata, M. Anthropological Study on the Generation and Transformation of the Lifelong Relationships between Humans and Things, International Research Forum of African Studies: The Role of on-site Research for Innovation & STEM education, Kyoto, Japan, 7-9 February 2021 (online). Suzuki, N., Kaneko, M. Review on rating scales for the functional status of the elderly I, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Anthropological Studies, 23 February 2022 (online). Kanamori, K. Life course of women with higher education and their role in social change in contemporary Sudan: A case study of social activism in the 2019 protests, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).
Koike, S., Uematsu, A., Sasabayashi, D., Maikusa, N., Takahashi, T., Ohi, K., Nakajima, S., Noda, Y., Hirano, Y. 2022. Recent advances and future directions of brain MRI studies in schizophrenia through the life course: Toward elucidating brain pathology and developing clinical tools. <i>Magnetic Resonance in Medical Sciences</i> 21(4): 539-552.	木村亮. 2023. 症例報告のポイント——希少疾患研究 ウィリアムズ症候群. 精神医学 65(1)：21-29.	Kaneko, M. Introduction, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online). Yamakoshi, G. Lifespan in wild chimpanzees: Its implications on evolution and conservation, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online). Fushiki, K. Lessons in nature: Learning process of techniques, knowledge and aesthetics of Balinese gamelan music and dance, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Shimoto, M. Health Service Utilization and Issues Related to Childbirth：Papua New Guinea Arapesh Women’s Choice of Place of Delivery, 82nd Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology, Salt Lake City, USA, 22-26 March 2022 (online). Mihara, M., Izumika, R., Tsukiura, T. Remembering unexpected beauty: Contributions of the ventral striatum to the effect of reward prediction errors in attractiveness for masked faces on face memories, 29th Annual Meeting of the Cognitive Neuroscience Society, San Francisco, USA, 23-26 April 2022 (online).
月浦崇. 2022. 超高齢社会における新しい生涯観の基盤となる基礎研究とその社会実装：学術変革領域研究(A)「生涯学」がめざすもの. 老年社会科学 44(3)：276-281. 三浦貴大. 2022. 福祉・介護を取り巻く技術とその社会実装. Aging&Health 31(3)：11-16.	Kikutani, M., Matsui, M., Takiguchi, Y. 2023. The relationship between daily behavior changes and vaccine attitudes at the early stage of the COVID-19 pandemic among Japanese in different demographics: The retrospective and exploratory examination using a free-response survey. <i>Vaccines</i> 11(1): 192.	Mitsushima, K. Material Life Cycle and Learning the Trade: Abandoned Vehicle Repair in Urban Ghana, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Uchida, S., Moriya, J., Shimura, M., Kagitani, F. Nicotinic cholinergic regulation of blood flow responses in the olfactory bulb in adult and aged rats, 第22回国際老年学会議 (IAGG2022), 12 – 16 June 2022(online).
Matsuo, M., Miura, T., Ichikari, R., Kato, K., Kurata, T. 2022. Tracing Interaction on OTASCE Map by the Visually Impaired: Feasibility of Adopting Interactive Route Guidance. <i>2022 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC)</i> 1540-1545.	Ebina, K., Matsui, M., Kinoshita, M., Saito, D., Nakada, M. 2023. The effect of damage to the white matter network and premorbid intellectual ability on postoperative verbal short-term memory and functional outcome in patients with brain lesions. <i>PLos One</i> 18(1): e0280580.	Hagiwara, T. Development of Cultivated Skills After Retirement: The Case of Kenyan Youth in Competitive Cycling, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Nisihta, Y., Otsuka, R., Arai, H. Frailty, Cognition, and Regional Gray Matter Volumes: Evidence from brain imaging analysis, Symposium: Delineating the brain-muscle crosstalk for disability and dementia prevention, 22nd World Congress of Gerontology and Geriatrics (IAGG2022), 17 June 2022 (online).
吉澤浩志. 2022. 認知予備能の脳内基盤——神経画像研究から. 老年精神医学雑誌 33(10)：1019-1029. 松井三枝. 2022. 認知予備力の神経心理学. 老年精神医学雑誌 33(10)：1013-1018.	Ishioka, Y.L., Masui, Y., Nakagawa, T., Ogawa, M., Inagaki, H., Yasumoto, S., Ikebe, K., Kamide, K., Arai, Y., Ishizaki, T., Gondo, Y. 2023. Early- to late-life environmental factors and late-life global cognition in septuagenarian and octogenarians: The SONIC study. <i>Acta Psychologica</i> 233: 103844.	Nagatsuka, S. Anthropological study on perceptual learning and verbalized bodily skills, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Miura, Y., Shinya, M. Different methods of foot elevation do not change the elevation position of the foot, World Congress of International Society of Posture and Gait Research (ISPGR2022), Montreal, QC, Canada, 4 July 2022.
小山竜司. 2022. ケルンサミット. 月刊公民館 786：34-37. 松田英子, 川瀬洋子. 2022. イメージ・リ스크リプトによる思春期悪夢低減効果の報告. 東洋大学社会学部紀要 60(1)：75-82.		Aihara, S. Dance performance and skill learning of professional traditional dancers in Addis Ababa, Ethiopia, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Yoshimoto, K., Mani, H., Kurogi, T., Aiko, T., Urano, Y., Shinya, M. Characteristics of obstacle avoidance strategy in children aged 2_5 years: A pilot study, World Congress of International Society of Posture and Gait Research (ISPGR2022), Montreal, QC, Canada, 4 July 2022.
● 図書	の課題」. 杉田映理, 新本万里子(編著). 『月経の人類学——女子生徒の「生理」と開発支援』. 世界思想社, pp.50-60.	Ogata, R. Inheritance of tradition and situated learning: From the case studies of learning on Ishigaki island and Yonaguni island, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Watanabe, M., Miura, T., Matsuo, M., Sakajiri, M., Onishi, J. GoalBaural-II: An Acoustic Virtual Reality Training Application for Goalball Players to Recognize Various Game Conditions, ICCHP-AAATE 2022, Lecco, Italy, 11-15 July 2022.
風間計博. 2022.『強制移住と怒りの民族誌——バナバ人の歴史記憶・政治闘争・エスニシティー』. 明石書店. 安井眞奈美. 2022.『狙われた身体——病いと妖怪とジェンダー』. 平凡社. 榎原隆次, 内田さえ(編著). 2022.『自律神経——初めて学ぶのためのマニュアル』. 中外医学社. 筒井淳也. 2022. 第19章「ジェンダーと労働・経済格差」. 日本発達心理学会(編), 高橋恵子, 大野 祥子, 渡邊 寛(責任編集). 『ジェンダーの発達科学(発達科学ハンドブック)』. 新曜社, pp.270-281.	新本万里子. 2022. 「バブアニューギニア焼畑農耕民アベラムの月経対処と開発支援のかたち」. 杉田映理, 新本万里子(編著). 『月経の人類学——女子生徒の「生理」と開発支援』. 世界思想社, pp.66-92.	Tanaka, A. Relationships among players in the practice of a gagaku performance group, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online).	Yoshimoto, K., Mani, H., Kurogi, T., Aiko, T., Urano, Y., Shinya, M. Dynamic stability during obstacle crossing in children aged 2_5 years: A pilot study, International Conference on Slips, Trips, and Falls Sendai 2022 (STF Sendai 2022), Miyagi, Japan, 22 July 2022.
杉田映理, 新本万里子(編著). 2022.『月経の人類学——女子生徒の「生理」と開発支援』. 世界思想社. 新本万里子. 2022. 「国際開発の対象となった月経の文化人類学	新本万里子. 2022. 「ローカルな文脈から見える開発実践への示唆」. 杉田映理, 新本万里子(編著). 『月経の人類学——女子生徒の「生理」と開発支援』. 世界思想社, pp.268-289. 松田英子. 2022.『解説夢教境的心理学(夢を読み解く心理学)』. 晨星出版. リチャード・M・ラーナー, 他. 2022. 「16章 青少年のポジティブな発達と関係—発達—システム」. リチャード・M・ラーナー, 他(編	Meseret, A. The formalization of childcare in urban Ethiopia: The regulation and utilization of private daycares in Addis Ababa, International Workshop on Lifelong Sciences and Anthropological Studies, 23 February 2022 (online). Suzuki, N. Review on rating scales for the functional status of the elderly II: With special reference to the IADL and QOL, International Workshop on Lifelong Sciences and	Kaneko, M. Multiple diversified perspectives on lifespan in super-aging societies: An anthropological approach for “Lifelong Sciences”, 21st International Conference of Ethiopian Studies, Addis Ababa, Ethiopia, 30 September 2022. Kaneko, M., Suzuki, N. Construction of the anthropological

approaches for the lifelong sciences: Rating scales for the functional status of the elderly in fieldwork, 21st International Conference of Ethiopian Studies, Addis Ababa, Ethiopia, 30 September 2022.

Nishita, Y., Sala, G., Tange, C., Tomida, M., Zhang, S., Furuya, K., Ando, F., Shimokata, H., Otsuka, R., Arai, H. The longitudinal association between cognitive function and physical function in community-dwelling older adults: A 20-year follow-up study, The 8th ASIAN CONFERENCE for FRAILITY AND SARCOPENIA, Nagoya, Japan, 27 October 2022.

Matsuo, M., Miura, T., Ichikari, R., Kato, K., Kurata, T. Tracing Interaction on OTASCE Map by the Visually Impaired: Feasibility of Adopting Interactive Route Guidance. 2022 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC), Prague, Czech, 11 October 2022.

Shiomi, Y., Izumika, R., Cho, M., Nouchi, R., Tsukiura, T. Dissociable neural mechanisms among subsystems in the default mode network underlying age-related differences in the survival effect on episodic memories. 51th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, San Diego, USA, 13 November

● 国内学会

石原暢, 学力とスポーツ競技力を同時に高めることは可能なのか?, 第76回日本体力医学会大会, 2021年9月19日(オンライン).

程雨田, 権藤恭之, SONIC研究グループ, 高齢者の対面と非対面ソーシャルネットワークが精神的健康に与える影響, 第16回日本応用老年学会大会, 2021年11月6日-7日(オンライン).

新本万里子, 出産をめぐる医療サービスの利用と課題——パプアニューギニアアラベシュ人女性の出産場所の選択をめぐる, 国際開発学会 第32回全国大会, 金沢, 2021年11月20日(オンライン).

松田英子, 松岡和生, 悪夢のイメージリハーサルセラピーにおけるイメージスクリプトの分類に関する予備的研究, 日本イメージ心理学会第22回大会, 2021年12月4日(オンライン).

山崎有望, 松田英子, 空想傾性の発達形成モデルの実証的研究——多母集団同時分析を用いた幼少期養育関係の検討, 日本イメージ心理学会第22回大会, 2021年12月4日(オンライン).

松岡和生, 川原正弘, 山口浩, 松田英子, ハイパーファンタジアとしての直観像素質者と共感覚者の認知特性, 日本イメージ心理学会第22回大会, 2021年12月4日(オンライン).

内田さえ, 鍵谷方子, 前脳基底部コリン作動系に関する基礎及び臨床研究, 第48回自律神経生理研究会, 東京, 2021年12月5日.

内田さえ, 鍵谷方子, 嗅覚調節と認知機能, 第10回日本情動学会, 名古屋, 2021年12月11日-12日.

滝口雄太, 蝦名昂大, 相上律子, 松井三枝, どのような余暇活動の側面が良好なメンタルヘルスに寄与するか——ライフスタイルの変化による余暇の取り組みの違いを考慮して, 北陸心理学会第56回大会, 金沢, 2021年12月18日(オンライン).

蝦名昂大, 松井三枝, 木下雅史, 斎藤大輔, 中田光俊, 脳腫瘍患者のワーキングメモリに対する白質神経線維束の損傷および認知予備力の影響, 北陸心理学会第56回大会, 金沢, 2021年12月18日(オンライン).

新本万里子, パプアニューギニア焼畑農耕民アベラムの月経対処と開発支援のかたち, 総合地球環境学研究所, 京都, 2022年1月26日(オンライン).

澤田知恭, 原田悦子, 会話において「ターンを取得して話し出すこと」の認知的負荷——「ターンを取得して話し出すこと」の認知的負荷は会話相手によって変化するか, 日本認知心理学会 第19回大会, 2022年2月28日-3月1日(オンライン).

西田裕紀子, 認知の予備力と認知機能の加齢変化——NILS-

2022.

Harada, E., Takawaki, R., Tanaka, E. Is There Super-Audience Design for Arousal Tuning? An Evaluation Study of Utterances by Professional Caregivers to Elder People in a Virtual Setting. 63rd Annual Meeting of Psychonomic Society, Boston, USA, 17-20 November 2022 (online).

Suzuki, A., Ishikawa, K., Okubo, M. Age-related improvement in face-based trustworthiness judgment: A comparison of younger, middle-aged, and older adults. 63rd Annual Meeting of the Psychonomic Society, Boston, USA, 17-20 November 2022 (online).

Shinmoto, M. Knowledge about Menstruation and Women’s Life Course: A Case Study of the Abelam in Papua New Guinea, 2022 Annual Meeting, American Anthropological Association, Seattle, USA, 12 December 2022.

Kasai, Y. An Analysis of the Distribution of Small Place Names: The Case of Ritto City, Shiga Prefecture, Japan, 2023 American Association of Geographers Annual Meeting, Denver, USA, 23-27 March 2023.

LSAより, シンポジウム『認知の予備力について考える——疫学調査の知見から』, 日本認知心理学会第19回大会, 2022年2月28日(オンライン).

中川威, 安元佐織, 樺山舞, 松田謙一, 権藤恭之, 神出計, 池邊一典, 高齢者における日々の社会的交流と感情の関連——日誌調査による検討, 日本発達心理学会第33回大会, 2022年3月5日-7日(オンライン).

権藤恭之, 人生最晩年における心理的適応の様相, シンポジウム『「生涯発達における発達の最適化とWell-being」成人期・老年期の適応的な発達と支援』, 日本発達心理学会第33回大会, 2022年3月6日(オンライン).

西田裕紀子, Psychological well being——「よりよく生きる」の構成要素, シンポジウム『「生涯発達における発達の最適化とWell-being」成人期・老年期の適応的な発達と支援』, 日本発達心理学会第33回大会, 2022年3月6日(オンライン).

Uchida, S., Kagitani, F. Studies on the relationship between olfaction and cognitive function in the elderly, 第99回日本生理学会大会, 仙台, 2022年3月16日-18日.

新本万里子, 出産をめぐる医療サービスの利用と課題——パプアニューギニアアラベシュ人の出産場所の選択をめぐる, 日本オセアニア学会, 2022年3月17日(オンライン).

松田英子, 指定討論, 日本パーソナリティ心理学会・日本青年心理学会合同シンポジウム『多様な青年のパーソナリティの発達の問題を考える』, 2022年3月26日(オンライン).

鈴木敦命, 石川健太, 大久保街亜, 高齢者の直感的信頼は若年者に比べて正確性が高くバイアスが弱い, 日本感情心理学会第30回大会, 西宮, 2022年5月29日.

新本万里子, パプアニューギニアにおける月経教育とジェンダー——焼畑農耕民アベラムを対象とした調査から, 分科会「グローバル化時代の月経教育とジェンダー」, 日本文化人類学会第56回研究大会, 東京, 2022年6月4日.

内田さえ, 島田千穂, 佐久間尚子, 菅重希子, 鍵谷方子, 栗田主一, 認知的フレイルの早期診断と予防のための嗅覚機能に関する探索的研究, 第10回TOBIRA研究交流フォーラム, 東京, 2022年6月10日.

中田光俊, 中嶋理帆, 木下雅史, 松井三枝, 脳腫瘍摘出後の高次脳機能低下に対する認知予備力の影響, シンポジウム『認知症と高次脳機能障害』, 第6回日本脳神経外科認知症学会, 秋田, 2022年6月11日.

笠井賢紀, 伊勢講勘定帳から読み解く生活の周辺情報, 日本生活学会第49回研究発表大会, 武蔵野, 2022年6月12日.

竹山和弘, 木村敏, 笠井賢紀, 非専門家による「住まいの記憶史」調査の実践, 日本生活学会第49回研究発表大会, 武蔵野, 2022年6月12日.

笠井賢紀, 北海道開拓者とファミリーヒストリー, 日本平和学会 2022年度春季研究大会, 網走, 2022年6月18日.

新本万里子, 可視化されていた月経——パプアニューギニア・アベラム人の月経対処, ダイバーシティ推進サテライト企画『フィールドワークと月経をめぐる対話——熱帯に暮らす人・動物・フィールドワーカー』, 日本熱帯生態学会第32回年次大会, 名古屋, 2022年6月19日.

Miyazaki, A., Matsuda, T., Ishihara, T. Contribution of diffusion MRI tractography to the understanding of the relationship between physical function and working memory in healthy young adults, NEURO2022, 宜野湾, 2022年6月30日-7月3日.

Ishihara, T., Miyazaki, A., Matsuda, T. Multimodal imaging brain markers of physical-cognitive health interaction in young adults, NEURO2022, 宜野湾, 2022年6月30日-7月3日.

Kuroda, Y., Ishihara, T. Relevance of perceived exertion and neurocognitive functions on serve accuracy among male university tennis players, NEURO2022, 宜野湾, 2022年6月30日—7月3日.

権藤恭之, 指定討論, シンポジウム『「学際的」な老年学研究のこれまでとこれから』, 日本老年社会科学会第64回大会, 東京, 2022年7月2日.

吉田祐子, 石崎達郎, 増井幸恵, 稲垣宏樹, 小川まどか, 安元佐織, 新井康通, 神出計, 池邊一典, 権藤恭之, 高齢者の多剤服用と健康度自己評価の関連——SONIC縦断研究70歳／80歳／90歳コホートより, 日本老年社会科学会第64回大会, 東京, 2022年7月2日-3日.

程雨田, 権藤恭之, 春日彩花, 石崎達郎, 増井幸恵, 神出計, 池邊一典, 高齢者の交流形態と主観的幸福感の関係——対面交流と非対面交流を注目して, 日本老年社会科学会第64回大会, 東京, 2022年7月2日-3日.

増井幸恵, 権藤恭之, 中川威, 小川まどか, 春日彩花, 安元佐織, 吉田祐子, 井藤佳恵, 神出計, 池邊一典, 石崎達郎, 前期高齢者における老年的超越の4時点9年間の縦断変化——潜在成長曲線モデルによる軌跡の評価と脱落の影響の検討, 日本老年社会科学会第64回大会, 東京, 2022年7月2日-3日.

小川まどか, 中川威, 増井幸恵, Giovanni Sala, 春日彩花, 西田裕紀子, 権藤恭之, 大規模研究間でのハーモナイズドデータ構築の試み, 日本老年社会科学会第64回大会, 東京, 2022年7月3日.

石岡良子, 人生初期から後期における認知的刺激のある生活環境と高齢期の認知機能との関連——SONIC研究より, 第28回精神神経内分泌免疫学研究集会・日本認知心理学会高齢者心理研究部会第19回研究会, 大阪, 2022年7月9日.

Uchida, S., Moriya, J., Shimura, M., Kagitani, F. Effect of age on nicotinic cholinergic regulation of olfactory bulb blood flow response, 第45回日本基礎老化学会大会, 京都, 2022年7月27日-28日(ハイブリッド).

倉田誠, フィールドを基盤とした学際的共同研究の可能性, 学術変革領域研究(A)「生涯学の創出 超高齢社会における発達・加齢観の刷新」2022年度第1回領域会議, 南三陸, 2022年8月27日-28日.

澤田知恭, 原田悦子, 若年成人と高齢者におけるターン割り当て規則の違い——重複に対する回復方法の会話分析から, 日本認知心理学会第39回大会, 2022年9月8日-10日(オンライン).

澤田知恭, 原田悦子, 会話において「ターンを取得して話し出すこと」の認知的負荷——会話相手が友人か初対面かによる比較, 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月8日-11日.

中山真孝, 瀬川裕美, 内田由紀子, 日々の暮らしと幸福感の個人間・個人内変動の関連——深層学習技術を用いたテキスト分析による検討, 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月8日-11日(ハイブリッド).

松岡和生, 松田英子, 新型コロナウイルス感染状況下における大学生の夢見の変容(1), 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月8日(ハイブリッド).

松岡和生, 松田英子, 新型コロナウイルス感染状況下における大学生の夢見の変容(2), 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月8日(ハイブリッド).

増井幸恵, 中川威, 権藤恭之, 安元佐織, 小川まどか, 石岡良子, 春日彩花, 堀紀子, 稲垣宏樹, 吉田祐子, 井藤佳恵, 高山緑, 新井康通, 池邊一典, 神出計, 石崎達郎, 地域在住高齢者における老年的超越の9年間の縦断変化——軌跡の年齢差と性差, 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月8日-11日.

蝦名昂大, 松井三枝, 木下雅史, 斎藤大輔, 中田光俊, 脳腫瘍患者における術後言語性短記憶に対する病前知的機能と白質神経線維束損傷の影響, 第46回日本神経心理学学会学術集会, 札幌, 2022年9月8日-9日(ハイブリッド).

吉澤浩志, 松井三枝, 伊藤梓, 北川一夫, 初期Alzheimer病における認知予備能の検討, 第46回日本神経心理学学会学術集会, 札幌, 2022年9月8日-9日(ハイブリッド).

滝口雄太, 松井三枝, 菊谷まり子, 蝦名昂大, 余暇活動の多面的な要素とメンタルヘルスの関係——認知、身体、社会的要素に着目した評価方法を用いて, 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月8日-11日(ハイブリッド).

菊谷まり子, 松井三枝, 滝口雄太, 蝦名昂大, スクリプト記憶検査のための日本語版Situational Feature Recognition Test (SFRT) の作成, 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月8日-11日(ハイブリッド).

朴白順, 毛利拓, 増田柚衣, 上田敬太, 上野仙経, 生方志浦, 村井俊哉, 月浦崇, びまん性軸索損傷患者における加速的長期忘却, 第46回日本神経心理学学会学術集会, 札幌, 2022年9月9日(ハイブリッド・オンデマンド).

鈴木敦命, 石川健太, 大久保街亜, 顔信頼性印象の正確性とメタ正確性の年齢関連差, 日本心理学会第86回大会, 東京, 2022年9月10日(ハイブリッド).

四條真也, 先住性と「血の割合」——ハワイアン・ホームステッドを事例に, 日本アメリカ史学会 第19回年次大会, 東京, 2022年9月17日-18日.

西山慧, 中山真孝, 自由記述を用いた日々のエピソード記憶の測定——深層学習技術を用いた試み, 日本認知心理学会 第20回大会, 神戸, 2022年10月15日-16日.

原田新也, 寺岡 諒・黒田尚輝, 日高聡太, 寺本 渉, 非空間的な聴覚手がかりは高齢者の視覚探索を促進するか?, ヒューマン情報処理研究会(HIP), 京都, 2022年10月28日.

小池進介, MRI構造画像による精神疾患の機械学習と、その精緻化に向けた取り組み, 第44回日本生物学的精神医学会年会(BPCNPNNPPP4学会合同年会), 東京, 2022年11月4日-6日.

小池進介, 1,000計測以上の縦断脳画像データの解析技法開発と臨床応用, 第44回日本生物学的精神医学会年会(BPCNPNNPPP4学会合同年会), 東京, 2022年11月4日-6日.

松田英子, イメージリスクリプトによる児童の悪夢軽減効果の予備的検討——イメージリハーサルセラピーをベースにしたWEB実験の結果分析, 日本ストレスマネジメント学会第20回大会, 久留米, 2022年11月5日-6日.

松本佐知子, 江口洋子, 深堀浩樹, 真志田祐理子, 文鐘玉, 新村秀人, 三村將, 超高齢者の「比較的自由した生活」に関する研究——インタビュー調査によるエイジング・イン・プレイスの概念の探索, 日本老年行動科学会 第24回大会, 京都, 2022年11月13日(ハイブリッド).

「生涯学」国際シンポジウム開催報告

International Symposium on Lifelong Sciences

2023年3月19日ー20日に かけて「生涯学」国際シンポジウムを開催しました。「生涯学」プロジェクトは2022年度で3年目をむかえ、国外の研究者とより活発に学術交流に取り組むことを念頭において、海外から8人の研究者をゲストスピーカーとして招聘し、これまでのプロジェクトの研究成果を広く発信しました。

2023年3月19日 10:00ー18:40
20日 10:00ー13:00

京都大学医学部創立百周年記念施設 芝蘭会館

The “Lifelong Sciences” project, which is one of the Grant-in-Aid for Transformative Research Areas (A) supported by MEXT, aims to reconceptualize a human lifetime as a series of complex processes by interactions with the surrounding social values and social relationship, and to propose the contemporary view of development and aging by replacing the traditional view of them. To tackle these issues, we employ the multidisciplinary approach, which includes the fundamental research of psychology and neuroscience, sociology, cultural anthropology, and the practical research of lifelong learning. With the integration of these research areas, we would like to provide scientific evidence to realize comfortable lives in all generations, and to make a new program of lifelong learning using the results of fundamental research. In the international symposium of “Lifelong Sciences”, we would like to introduce the framework of this project in multidimensional talks by guest and domestic researchers, and to create directions of the “Lifelong Sciences” project toward the future research.

19th March 2023, 10:00-18:40 JST

20th March 2023, 10:00-13:00 JST

Shiran Kaikan, Kyoto University

Program

19th March 2023

◆…Guest Symposiast

10:00-10:10	Opening Remarks Takashi Tsukiura, Project leader/Kyoto University
Session I : Brain and Mind in Lifelong Sciences	
10:10-10:30	Yukiko Nishita, National Center for Geriatrics and Gerontology “Psychological resources for aging well: Evidence from an Interdisciplinary Study”
10:30-11:00	Jennifer Campos, Toronto Rehabilitation Institute ◆ “Multisensory Interactions Supporting Mobility in Aging”
11:00-11:20	Kentaro Oba, Tohoku University “To Remember life fondly: Finding reasons for nostalgia”
11:20-11:50	Yuta Katsumi, Harvard Medical School ◆ “From <i>Description to Modulation</i> : Current evidence and emerging directions in multimodal neuroimaging of Alzheimer's disease”
11:50-12:10	Masahiro Kawasaki, University of Tsukuba [Online] “Behavioral synchronization and EEG synchronization for human-human communication”
12:10-12:30	General Discussion
12:30-14:00	Lunch Time
Session II : Societies and Social Implementation in Lifelong Sciences	
14:00-14:20	Haruka Shibata, Kyoto University “How does public support in early life affect outcomes in adulthood?: Long-term effects of nation-wide early childhood education and care at ages 0-2”
14:20-14:50	Kiichi Oyasu, Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO ◆ “Aspects of a Lifelong Learning Society and its Policies”
14:50-15:20	Koichiro Zamma, Nagano Collage of Nursing “Biological and cultural diversity of sleep and our view of sleep”
15:20-15:40	Break
15:40-16:00	Michele Friedner, University of Chicago ◆ “Becoming Normal: Cochlear Implantation, Hearing Brains, and Ambivalent Use”
16:00-16:30	Jeanette Akane Chabot ◆ “Positive health, a new dynamic concept of health from the Netherlands”
16:30-16:50	General Discussion
16:50-17:10	Break
17:10-18:40	Poster Session

20th March 2023

Session III : Interdisciplinary Approach on Lifelong Sciences	
10:00-10:20	Takahiro Miura, AIST “Investigating Resilience Elements Based on Insights from Life Histories of People with Visual and Hearing Impairments”
10:20-10:50	Christopher Karl Germer, Harvard Medical School [Online] ◆ “The Power of Self-Compassion”
10:50-11:10	Miho Egawa, Kyoto University “Self-monitoring Using a Smartphone App for Managing Premenstrual Syndrome: Testing a Novel Tool for Empowering Reproductive-aged Women to Improve Healthcare Outcomes”
11:10-11:40	Kaori Fujishiro, National Institute for Occupational Safety & Health [Online] ◆ “How Work Can Be a Lifelong Source of Joy, Pride, Engagement, and Health: An Occupational Health Perspective”
11:40-12:00	Masahiro Shinya, Hiroshima University “Toward Understanding development of adaptive locomotion: a pilot study of quantification of obstacle crossing behavior in preschool children”
12:00-12:30	Keiko Katagiri, Kobe University ◆ “Moratorium among Japanese Third Agers”
12:30-12:50	General Discussion
12:50-13:00	Closing Remarks



Guest Symposiast

	Jennifer Campos Toronto Rehabilitation Institute
	Yuta Katsumi Harvard Medical School
	Kiichi Oyasu Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO
	Michele Friedner University of Chicago
	Jeanette Akane Chabot
	Christopher Karl Germer Harvard Medical School
	Kaori Fujishiro National Institute for Occupational Safety & Health
	Keiko Katagiri Kobe University

松田英子, 中国におけるコロナ・パンデミック・ドリームの実態——COVID-19感染予防のための都市封鎖が夢想起に与える影響, 新型コロナウィルス感染症対策検討WG企画シンポジウム, 日本健康心理学会第35回大会, 仙台, 2022年11月19日-20日.
松田英子, 川瀬洋子, イメージリクリプトによる思春期の悪夢低減効果に関する報告, 日本健康心理学会第35回大会, 仙台, 2022年11月19日-20日.
山崎有望, 松田英子, 空想傾性とパーソナリティ特性の関連の検討, 日本健康心理学会第35回大会, 仙台, 2022年11月19日-20日.
王尚, 松田英子, マインドフルネスストレス低減療法による在日中国人留学生の睡眠改善効果——睡眠の質, 入眠感及びネガティブ気分に関する実験的検討, 日本健康心理学会第35回大会, 仙台, 2022年11月19日-20日.
施竣訳, 王尚, 松田英子, 悪夢と明晰夢を想起する人の性格特性に関する研究——Big Fiveとの関連から日本人大学生と中国人大学生を比較する, 日本健康心理学会第35回大会, 仙台, 2022年11月19日-20日.
松田英子, 明晰夢の多様性と階層性に関する予備的研究, 日本イメージ心理学会第23回大会, 盛岡, 2022年11月26日-27日.
松田英子, 夢見と悪夢における統御性と非統御性, シンポジウム『心的イメージ体験における統御性と非統御性』, 日本イメージ心理学会第23回大会, 盛岡, 2022年11月26日-27日.
笠井賢紀, 玉川英則, 岡部佳世, 飯守光太郎, 飯田壮一郎, 高宮圭介, 花牟禮優大, 村林颯太, 中川敦之, 竹山和弘,

講演

石原暢, 運動・体力と認知機能の関係——脳マルチモーダルMRI研究, 第4回スポーツニューロサイエンス研究会, 2021年9月16日(オンライン).
月浦崇, 社会的文脈におけるヒト記憶の神経基盤, 第45回日本神経心理学会学術集会, 東京, 2021年9月30日(ハイブリッド).
倉田誠, ヒトモノ研究の構想と展望「生涯学」の創出に向けた試み, 京都大学こころの未来研究センター・人・文・理融合プロジェクト「未来創成学の挑戦 ポストパンデミックと共創力」, 京都, 2021年10月23日(オンライン).
内田さえ, 嗅覚と認知症をつなぐ脳内コリン作動系——早期発見と予防を目指して, 第74回日本自律神経学会総会, 2021年10月23-24日(オンライン).
石原暢, 体力・肥満と認知機能, 第11回社会神経科学研究会「脳・環境・臓器間ネットワークと社会性」, 2021年11月25日(オンライン).
Gondo, Y. Behavioral characteristic of older people under the COVID-19 pandemic; a longitudinal study, INNOVCARE Project 1st Annual Forum, France, 16 December 2021 (online).
西田裕紀子, 健康長寿社会における幸せな老いとは——高齢者心理学からのメッセージ, 放送大学愛知学習センター主催第56回オンライン講演会, 2022年2月19日(オンライン).
Gondo, Y. Theory of Gerotranscendence: a psychological concept filling the gap between psychological and physical successful aging, INTERNATIONAL COLLABORATIVE RESEARCH PROGRAM 2022_2nd Osaka University and UC Berkeley Jointed WEB Symposium, 8 March 2022 (online).
鈴木敦命, 顔表情画像による感情喚起——顔表情(対人)認知研究からの視点, 日本感情心理学会第30回大会, 西宮, 2022年5月28日.
鈴木敦命, 顔で人を判断する人の心理学, 「顔身体」新学術領域主催公開シンポジウム『ルッキズム』, 東京, 2022年8月6日.
石原暢, 幼少期の運動経験と将来の認知機能, 第30回日本運動生理学会大会 シンポジウムⅢ『子どもの身体活動と認知／非認知能力』, 岩見沢, 2022年8月25日.

松本章伸, 栗東歴史民俗博物館所蔵の地券取調総絵図の局地的歪みについて, 地理情報システム学会第31回学術研究発表大会, 那覇, 2022年11月30日.
原田新也, 寺岡諒, 黒田尚輝, 日高聡太, 寺本渉, 高齢者の視覚探索における非空間的な聴覚手がかりの影響, 日本基礎心理学会第41回大会, 千葉, 2022年12月2日-4日.
松田英子, 松岡和生, ハイパーファンタジアの夢体験時の認知・脳神経活動——睡眠実験室におけるREM 期中途覚醒法を用いた検討, 日本パーソナリティ心理学会第31回大会, 那覇, 2022年12月3日-4日.
施竣訳, 王尚, 松田英子, Big Five 性格特性とストレスコーピングの関連についての研究——在日中国人留学生、中国人大学生および日本人大学生の比較, 日本パーソナリティ心理学会第31回大会, 那覇, 2022年12月3日-4日.
杉山憲司, 松田英子, パーソナリティ心理学と社会課題への取り組み——各学問関連携および世代間討論の視点から, 日本パーソナリティ心理学会第31回大会, 那覇, 2022年12月3日-4日.
蝦名昂大, 松井三枝, 木下雅史, 斎藤大輔, 滝口雄太, 中田光俊, 脳腫瘍患者における腫瘍摘出手術後の認知機能と安静時機能的結合, 北陸心理学会第57回大会, 富山, 2022年12月17日.
滝口雄太, 蝦名昂大, 松井三枝, 生涯的な余暇活動によって認知機能の低下を抑えることができるのか——これまでに経験してきた活動や余暇の多様な側面を考慮して, 北陸心理学会第57回大会, 富山, 2022年12月17日.

月浦崇, 認知神経科学における症例研究の役割, 日本心理学会第86回大会シンポジウム『神経心理学における症例研究の現在』, 東京, 2022年9月8日(ハイブリッド).
石原暢, 身体的健康と脳の健康, 社会性, 日本社会心理学会第63回大会 ワークショップ『学際的な社会心理学の構築を目指して——若手研究者のための教育講演』, 京都, 2022年9月15日.
金子守恵, モノを作るヒト, 第76回日本人類学会大会・第38回日本霊長類学会大会連合大会(ASA-PSJ2022)人類学関連学会 5 学会合同公開シンポジウム『〇〇なヒト——ヒトの呼称も人それぞれ』, 京都, 2022年9月19日.
石原暢, 一過性運動が認知機能に与える影響——調整変数に着目したIPDメタ分析, 第77回日本体力医学会大会 シンポジウム11『一過性運動と認知機能——なぜ半数の研究が効果を認めていないのか?』, 2022年9月21日(オンライン).
月浦崇, 社会的文脈によって影響を受けるヒト記憶の神経メカニズムとその加齢変化, 2022年度生理研研究会 第12回社会神経科学研究会, 岡崎, 2022年10月27日-28日.
江口洋子, 大動脈弁狭窄症の治療にかかる医療同意に関する本人ならびに家族に対する支援, 第41回日本認知症学会学術集会/第37回日本老年精神医学会(合同開催) シンポジウム『認知症高齢者の医療同意能力評価と支援』, 東京, 2022年11月25日.
江口洋子, 高齢者の消費者被害, 第41回日本認知症学会学術集会／第37回日本老年精神医学会(合同開催) シンポジウム『老年金融学への招待』, 東京, 2022年11月25日.
月浦崇, 社会的文脈によって影響を受けるヒト記憶の神経メカニズムとその加齢変化, 大阪大学神経心理懇話会2022, 大阪, 2022年12月24日.